

部瀬名貝塚

—国道58号・部瀬名線道路線形改良事業に伴う緊急発掘調査報告書—



2001年3月

沖縄県名護市教育委員会

序

『部瀬名貝塚発掘調査報告書』を発行することができ、たいへん喜ばしく思います。発掘調査が行われた昨年は、「2000年九州・沖縄サミット」の開催にあたり世界の注目が沖縄に注がれた年であります。私たち沖縄県民は、世界各地からの方々をお迎え、接することにより沖縄の自然・文化・人々の気質など「沖縄らしさ」というものを伝えることができたと思います。さらに、これらの経験は沖縄の文化が世界に誇れるすばらしいものであることを確信しました。

2000年という年が沖縄県・名護市のこれからを方向づける年であったと共に、文化財保護行政にとっても大きな節目の年でありました。昭和25年に制定された文化財保護法は半世紀の節目を迎えました。埋蔵文化財を含め有形・無形の文化財は、私たちの長い歴史のなかで生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民の財産であります。現在、名護市における指定文化財は65件、遺跡の数は79遺跡が確認されています。これらの文化財産を、過去から現在、未来へと受け継いでいくために調査・保護を行い、広く活用していくかなければなりません。

最後になりますが、発掘調査および本報告書の作成にご協力頂いた関係各位のみなさまに深く感謝申し上げるとともに、本書が文化財愛護思想の高揚はもとより諸開発事業の協議・調整、研究等多くの方々に活用されることを願い、発刊のあいさつといたします。

平成13年（2001年）3月

名護市教育委員会
教育長 山里全用

例　言

1. 本報告書は、1999年から2000年（平成11年度）に実施した「部瀬名貝塚」緊急発掘調査の内容を記録したものである。
2. 発掘調査は「国道58号・部瀬名線道路線形改良事業」に伴うもので、沖縄総合事務局北部国道事務所（所長 仲村時男）より名護市（市長 岸本建男）が委託を受け、名護市教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/50000地形図と名護市役所発行の1/25000、1/10000地形図を使用した。
4. 本書の表紙に掲載した部瀬名岬の航空写真（1999年撮影）は、名護市マルチメディア推進協議会より提供して戴いた。
5. この報告書を作成するにあたり、発掘調査において出土した各資料の同定及び分類について下記の方々の協力・ご指導を賜った。記して謝意を表します。

石　器： 神谷厚昭（沖縄県立博物館）
土　器： 宮城弘樹（今帰仁村教育委員会）
貝製品： 島袋春美（沖縄県立埋蔵文化財センター）
6. 各章の執筆は下記のとおり分担した。

仲宗根 権（第Ⅰ～第Ⅳ章、第Ⅴ章第3～9節、第Ⅶ章）
新城 卓也（第Ⅴ章第1・2節）
7. 土器及び陶器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局及び（財）日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』2000年版を使用した。
8. 発掘調査において得られた出土遺物及び実測図・写真などの記録は、すべて名護市教育委員会社会教育課文化財係の資料室にて保管している。
9. 発掘調査及び資料整理などの調査体制については、第Ⅰ章第2節に記している。

報告書抄録

ふりがな	ぶせなかいづか							
書名	部瀬名貝塚							
副書名	国道58号・部瀬名線道路線形改良事業に伴う緊急発掘調査							
卷次								
シリーズ名	名護市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	仲宗根 祯・新城 卓也							
編集機関	名護市教育委員会社会教育課文化財係							
所在地	〒905-8540 沖縄県名護市港一丁目1番1号 TEL(0980) 53-5429							
発行年月日	2001年(平成13年)3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
部瀬名貝塚	沖縄県名護市 字喜瀬部瀬名原	名護市 47209	6-16 『名護市の 遺跡(2)』 1982年			1999.12/1 ～ 2000.1/20	290	国道58号・ 部瀬名線道 路線形改良 工事に伴う 緊急発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記記事	
部瀬名貝塚	古集落跡	沖縄貝塚時代 後期 近世		土器 石器 貝製品 陶器				

目 次

序

例 言

報告書抄録

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査体制	9

第Ⅱ章 位置と環境

第Ⅲ章 調査経過

第Ⅳ章 層序と遺構

第1節 層序	15
第2節 遺構	17

第Ⅴ章 出土遺物

第1節 土器	21
第2節 石器	27
第3節 貝製品	29
第4節 沖縄産施釉陶器	33
第5節 沖縄産無釉陶器	36
第6節 陶質土器	38
第7節 タイ産褐釉陶器	39
第8節 骨類	40
第9節 貝類	40

第VI章 結語

付編

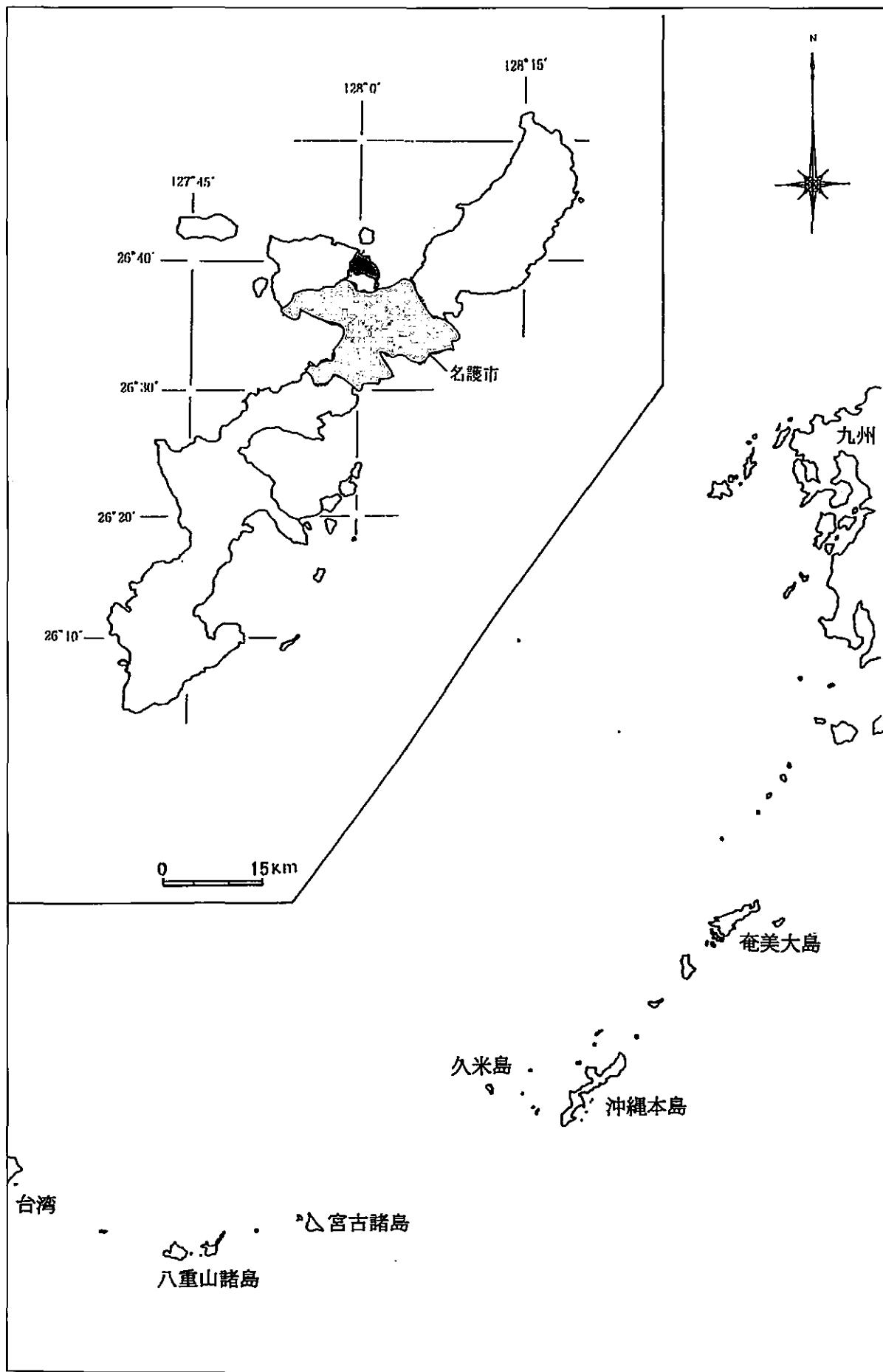
1. 名護市の遺跡一覧	66
2. 名護市の指定文化財総括表	69

挿図目次

第1図	名護市の位置図	8
第2図	部瀬名貝塚の位置図	10
第3図	部瀬名貝塚周辺の遺跡・文化財分布図	11
第4図	部瀬名貝塚周辺の小地名図	12
第5図	調査区及びグリッド設定図	14
第6図	断面実測図1	16
第7図	断面実測図2	18
第8図	断面実測図3	19
第9図	断面実測図4	20
第10図	土器（口縁部1～13）	25
第11図	土器（底部1～11、胴部12～18）	26
第12図	石器	28
第13図	貝製品1	30
第14図	貝製品2	31
第15図	貝製品3	32
第16図	沖縄産施釉陶器	35
第17図	沖縄産無釉陶器	37
第18図	陶質土器	38
第19図	タイ産褐釉陶器	39
第20図	部瀬名貝塚調査地点図	42

挿表目次

第1表	出土土器観察一覧表	22
第2表	地区別土器出土表	24
第3表	沖縄産施釉陶器所見一覧表	34
第4表	沖縄産無釉陶器出土一覧表	36
第5表	陶質土器出土状況	38
第6表	タイ産褐釉陶器集計表	39



第1図 名護市の位置図

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成10年11月、名護市建設部建設課より名護市教育委員会（以下、市教育委員会）へ喜瀬地内における埋蔵文化財の有無について照会がなされた。同地区において「市道・部瀬名線道路改良事業」が計画されているためである。これに対し、市教育委員会は工事予定地内において、周知の遺跡である部瀬名貝塚の広がりが予想されることから、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、平成11年6月8日から実施されたが、「2000年九州・沖縄サミット」の開催にあたり、会場の部瀬名岬に接する国道58号の部瀬名線道路線形改良事業が計画され、急遽、国道部分も併せて行った。その後、沖縄総合事務局北部国道事務所（以下、北部国道事務所）と市教育委員会で埋蔵文化財の取扱いについて協議・調整を行い、工事予定地内における既存建物の撤去が済み次第、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することに両者が合意した。その間、市教育委員会は調査体制を整え、平成11年12月から部瀬名貝塚の緊急発掘調査を実施した。

第2節 調査体制

発掘調査（平成11年度）から資料整理及び報告書の刊行（平成12年度）まで、下記の体制で実施した。

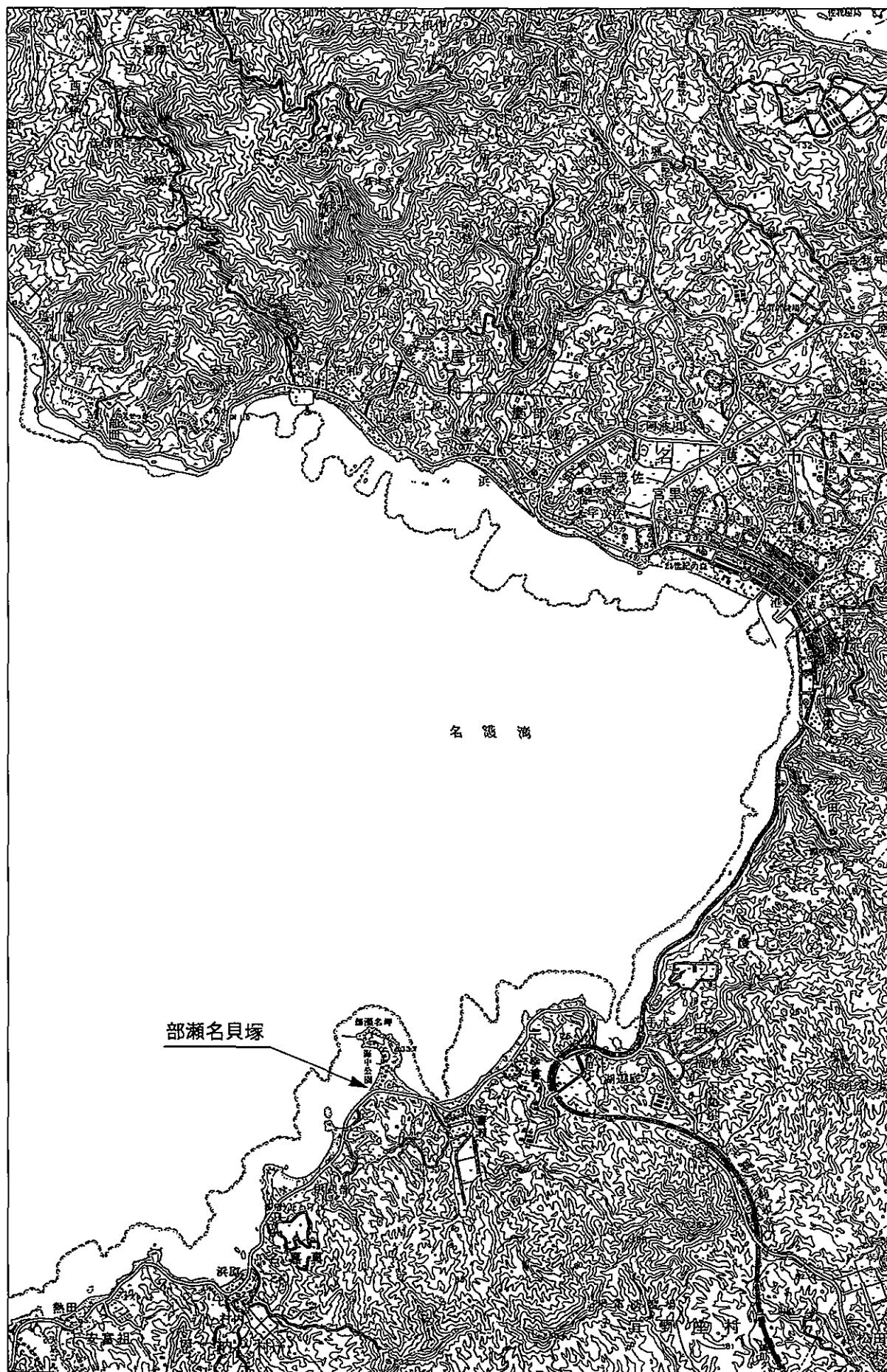
調査主体……………名護市教育委員会
調査総括……………名護市教育委員会教育長 山里全用
調査責任者……………社会教育課長 平良芳一
総務責任者……………文化財係長 島福善弘
総務……………渡口 裕
調査員……………仲宗根禎
調査補助員……………仲村美代子
……………新城卓也（平成12年度～）
資料整理員……………神谷祐子
……………喜納 聰（平成11年度）
……………平 貢（平成12年度～）

発掘作業員

伊藤文、大城清光、岸本 勝、具志堅興裕、呉屋太郎、崎間宗助、平良昌也、平良幸男、徳嶺朝直、仲井間敏子、比嘉真正、比嘉善助、比嘉幸子、富名越明、山城キヨ子、山城正則

資料整理作業員

安次富 京子、玉城 好浩、岸本 美枝子



第2図 部瀬名貝塚の位置図

第Ⅱ章 位置と環境

部瀬名貝塚は、名護市と恩納村の境近くに位置する砂丘遺跡で、行政上は沖縄県名護市字喜瀬部瀬名原に所在する。

喜瀬集落から恩納村名嘉真小字伊武部原に抜ける国道58号線の北側に部瀬名岬が突出している。岬の先端は先新第三系の千枚岩類および第四系の段丘堆積物からなり、最高標高は33.7mである。貝塚が位置する南側の基部は、砂層からなる海岸低地である。

部瀬名岬を含む恩納村字宇嘉地から名護市世富慶の海岸沿いは、白砂が長く続き景観が特に優れた地域である。そのため1965年に「沖縄海岸政府立公園」に指定され、1972年の復帰にともない「沖縄海岸国定公園」となった。その後、1970年8月には沖縄海中公園が開園、1975年には隣接して国民宿舎名護浦荘が開設された。しかしその反面、部瀬名岬付近からは開発のため採砂が行われ、美しい景観が崩されるということもあった。

現在の部瀬名岬には、「ザ・ブセナテラス ビーチリゾート」や2000年G8サミット（主要国首脳会合）が行われた「万国津梁館」が位置する。

この部瀬名貝塚は、1953年に多和田真淳氏により発見され、同氏の「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」の中で「喜瀬包含地」と銘々され、「名護町字喜瀬、恩納村伊武部の海岸に近い。川田原貝塚系の土器が出土する。」と記されており、多和田編年の晚期に位置づけられていた。

引用文献：『角川 日本地名大辞典 47 沖縄県』 角川書店 1986年

多和田真淳 1956年版 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧』



第3図 部瀬名貝塚周辺の遺跡・文化財分布図



第4図 部瀬名貝塚周辺の小地名図

第Ⅲ章 調査経過

平成11年度（1999年度）

平成10年度、名護市建設部により喜瀬地内において市道・部瀬名線道路改良工事区域における埋蔵文化財等の有無を確認する照会がなされたことにより、平成11年（1999年）6月に名護市教育委員会が埋蔵文化財等の確認を行う試掘調査を行うこととなった。ところが、「2000年九州・沖縄サミット」の開催にあたり、会場の部瀬名岬に隣接する国道58号線の部瀬名線道路線形改良事業が計画され、急遽国道部分も併せて試掘調査を行うこととなった。

平成11年6月から約1ヶ月間に亘り実施された試掘調査の結果、両工事予定地内において埋蔵文化財が確認された。その後、本調査の対象は市道部分から国道部分に移り、沖縄総合事務局北部国道事務所（以下、北部国道事務所）と名護市教育委員会（以下、市教育委員会）の間において「部瀬名貝塚」の記録保存について協議がなされた。

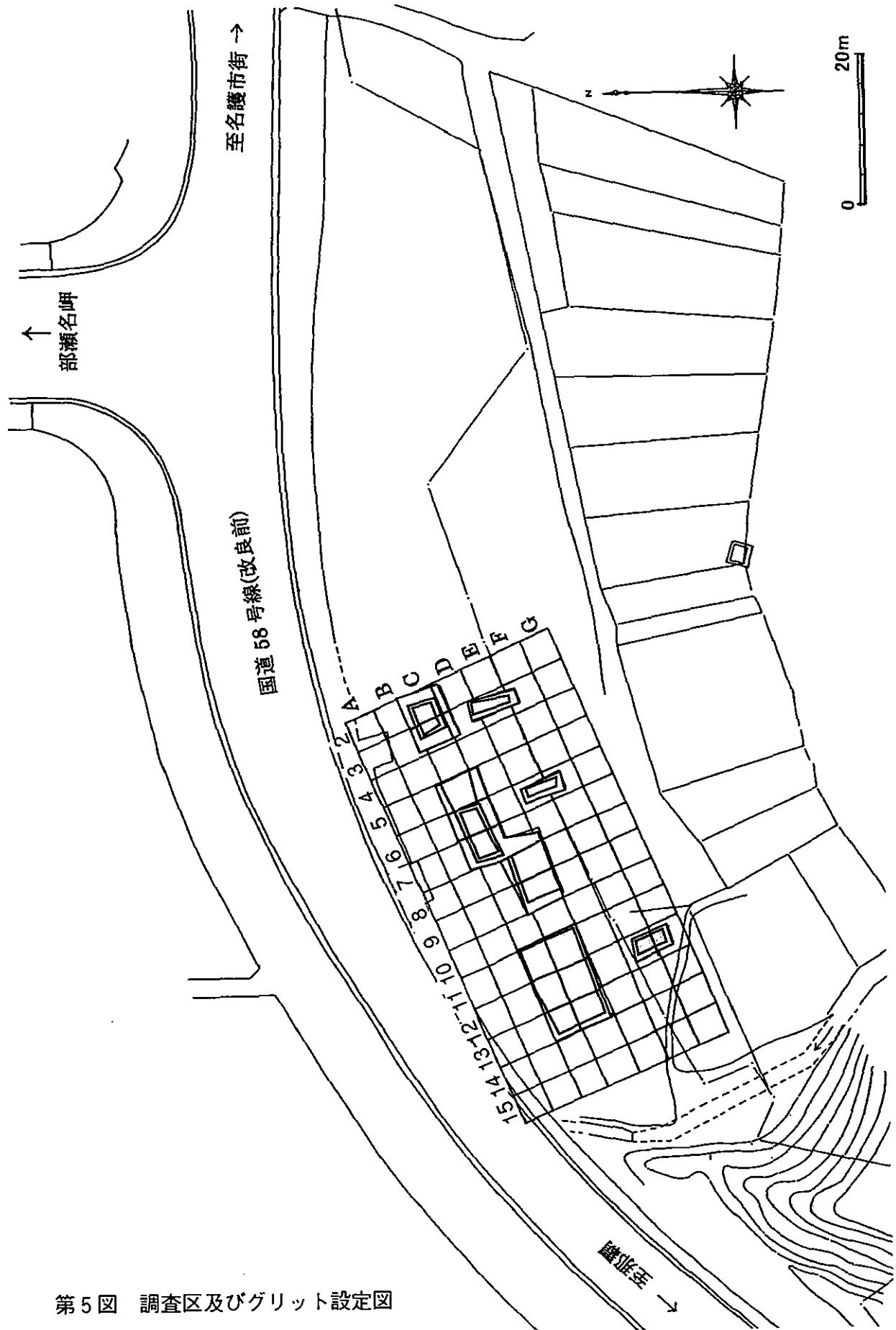
平成11年11月26日、北部国道事務所と市教育委員会において「部瀬名貝塚」の記録保存に関する協定を締結し、同年11月29日に平成11年度部瀬名貝塚発掘調査の委託契約が締結され、平成11年11月30日から平成12年2月29日を予定期間とする緊急発掘調査を実施することが決定した。

本調査は、平成11（1999）年12月1日から平成12（2000）年1月20日までの約2ヶ月に亘り実施された。当初、発掘調査範囲内に建物が既存していたため、北部国道事務所によりその解体と撤去から行われた。その後、12m×50mの範囲で深さ約1mの客土をバックホーにより除去し、道路改良工事のために20m間隔で設置されている工事杭（No50・No51）を基点に4m×4mを単位とするグリッドを設定した。

調査は、客土の除去により旧地表面が露出していた西側のC・D-11～13（I地区）から着手した。手堀により掘り下げていくと、予想されていた沖縄貝塚時代後期（約2000年～1500年前）の土器や石器が確認されたが、堆積状況や近世・現代の遺物と共に出土することから攪乱を受けていることが判明した。I地区における調査を行うなか、本来の堆積状況を保つ地点を探す為に西側から東側へと調査範囲を拡大していった。ところが、C・D-6～9（II地区）、C-2・3（III地区）のいずれの調査区においても攪乱を受けていた。深いところでは現地表面から2mもの客土が堆積し、その下の砂層では茶褐色砂と白砂がマーブル状に堆積していた。そのため、貝塚時代当時の人々の生活跡を示す遺構も検出されなかった。さらに、調査区の南側に3ヵ所のトレンチを設け確認を行ったが、残念ながらそこでも攪乱が認められ、各地区の堆積状況の記録を取り発掘調査を終了した。

平成12年度（2000年度）

平成12年度は、協定書に基づき4月12日に年間の委託契約を締結した。本年度は、昨年度の発掘調査により出土した資料を洗浄・注記・接合を行った後、実測作業を行い発掘調査の成果をまとめた報告書の作成を行い、部瀬名貝塚発掘調査全体の業務を終了する。



第5図 調査区及びグリッド設定図

第IV章 層序と遺構

第1節 層序

発掘調査は西側から東側へと範囲を広げて行った。調査地区を大きく分けると、3つの地区に分けられる。I地区はC・D-11～13グリット及びF-12トレンチ。II地区はC-5～7、D-8・9グリット及びE-6トレンチ。III地区はC-2・3グリット及びE-3トレンチである。これら3地区では土壤の堆積状況が異なることから、層序を統一せずそれぞれ独立して扱った。以下、各地区ごとに層序を記述し、小結にて3地区における層序の相互関係及び整合性を考察する。

1. I地区 (C・D-11～13グリット / F-12トレンチ)

I層：客土。赤褐色～黄褐色土に粘板岩や石灰岩などの礫が混じる。

II層：暗茶褐色混礫砂層。

a：暗茶褐色混礫砂層。耕作土。I層を除去すると歯が検出された。

b：IIa層と同様であるが、ビニールパイプを埋設した際の堆積層である。

III層：灰褐色砂層。黒褐色及び茶褐色砂と白砂がマーブル状に混じる層。

IV層：赤褐色砂を主体とする層である。a～fの6つの層に細分される。

a：淡赤褐色砂にシルト質の土が混じる層。

b：淡茶褐色混礫砂層。

c：茶褐色混土砂層。

d：暗赤褐色砂層。上位層が混じる。

e：淡茶褐色砂層。C・D-11・12に分布する。

f：暗赤褐色砂層。

V層：赤茶褐色砂層。

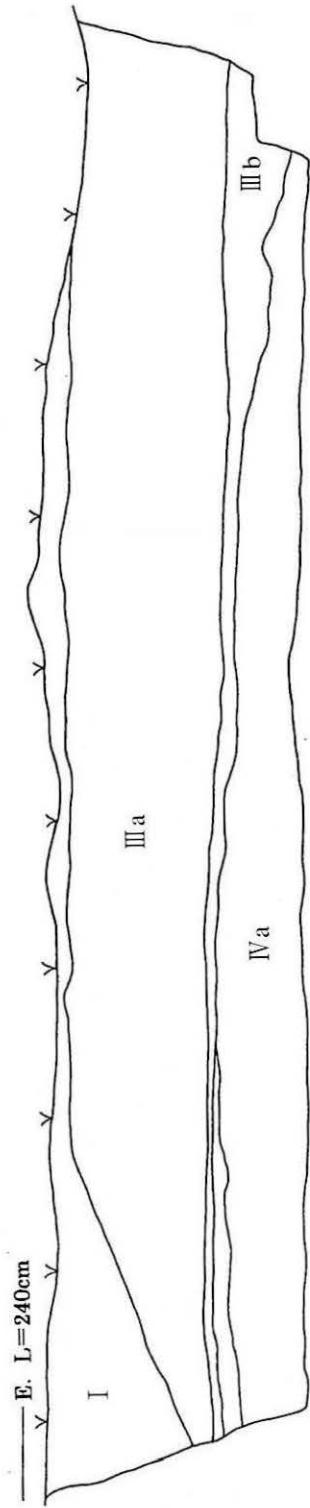
VI層：明赤褐色砂層。C-12グリットにおける上面では重機のキャタピラ跡が検出された。

VII層：暗茶褐色混土砂層。海岸方向へ傾斜しており、低くなるに従い土の混入の割合が増し、シルト質をなす。

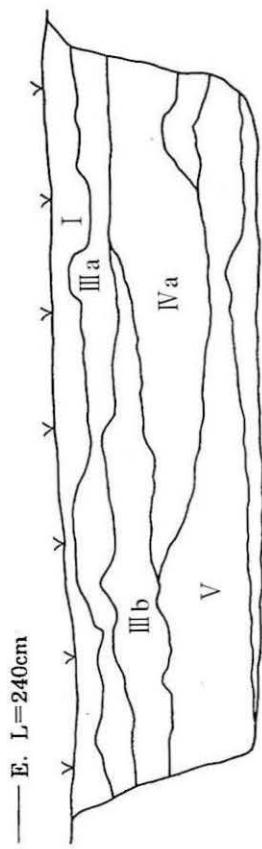
VIII層：暗赤褐色砂層。

C-13グリットでの搅乱状態からこのような層序の扱いになったが、その他のグリットにおいては概ね I層→IIa層→III層→IVe層→VI層の堆積状況をなす。IIa層からIII層にまたがり沖縄貝塚時代後期の土器片が出土するに伴い、C・D-11グリットを中心に近世の陶器片や戦後の現代遺物も出土することが確認された。遺物の出土状況と断面に見られる堆積状況から IIa層～IVe層までは搅乱を受けていることは明らかである。V層以下については、まったく遺物が検出されない層である。

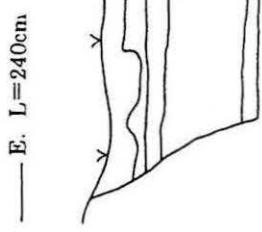
C-6・7 南壁



C-2・3 北壁



C-3 西壁

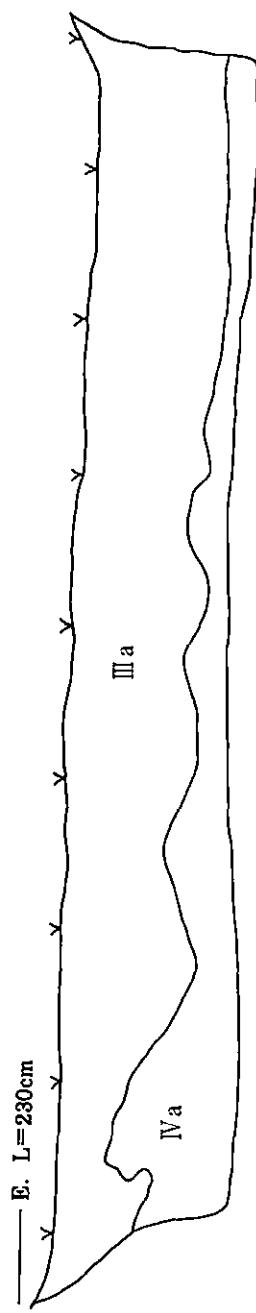


第7図 断面実測図2

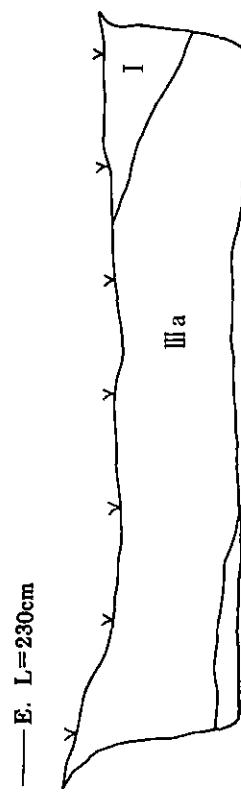


第8図 断面実測図3

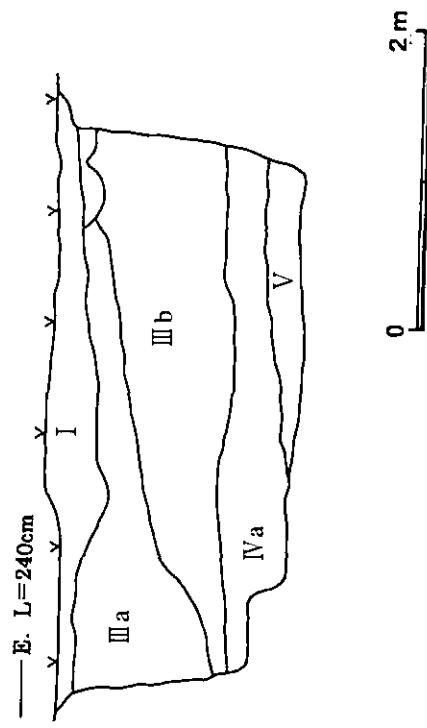
D-8・9 北壁



D-8 東壁



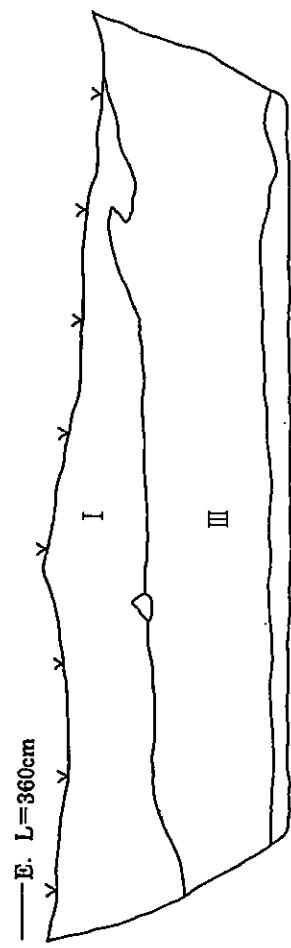
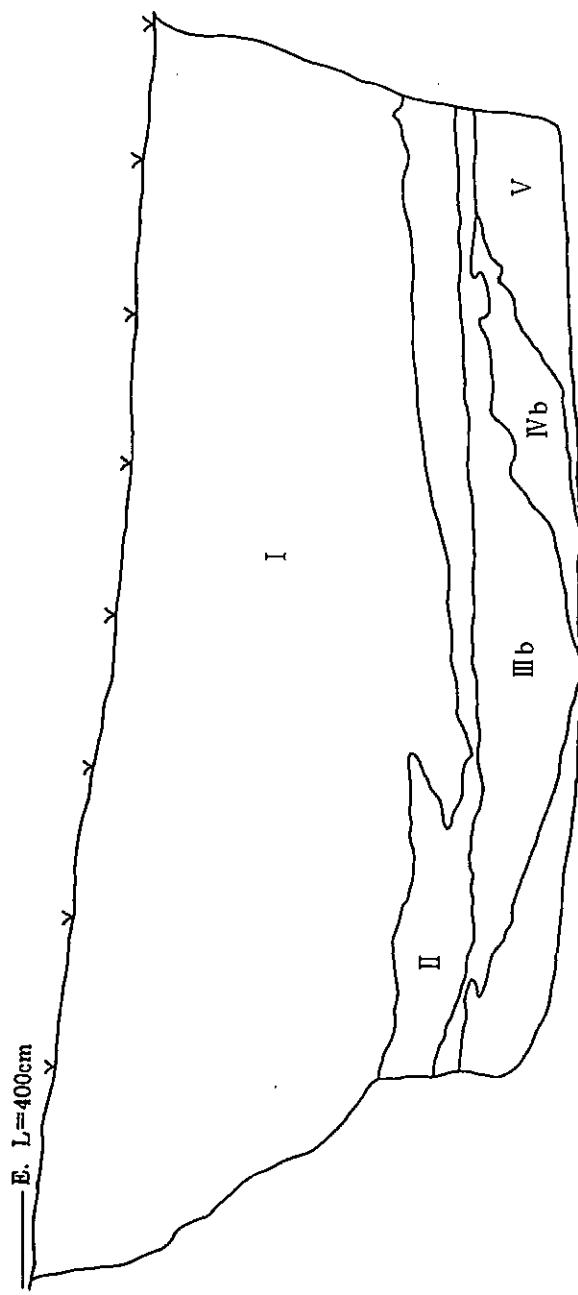
C-7 西壁



2m
0

E. L=400cm

E・F—3 西壁



第9図 断面実測図4

第V章 出土遺物

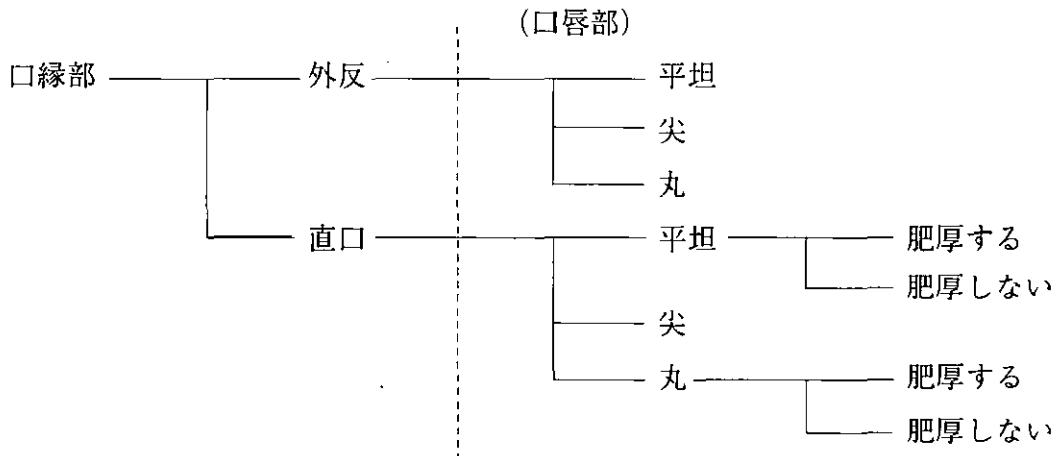
第1節 土器

土器は口縁部20点、底部17点、胴部337点、不明部位1点の総数375点が検出された。ほとんどの資料が小破片である。そのため土器の分類・器種の判別が困難であるので今回は割愛させていただき、本報告書に掲載した遺物についてのみ述べる。

土器の文様は無文が主体で、文様が施されている資料はごく少量である。施文部位はすべて胴部に含めた資料で、文様は貼付突帯文や隆起線文である。口縁部・底部に施文されている資料は1点も検出されなかった。

混入物は石灰質砂粒・石英・長石・角閃石・千枚岩・赤色粒が使用されていて、雲母・輝石を使用している資料もわずかだが数点検出された。

器面は指頭による調整もあるが、大半が工具によってナデ調整がなされている。丁寧にナデ調整がおこなわれている土器が主であるが、なかには雑にナデ調整がおこなわれている土器もある。



1. 口縁部資料

外反するタイプと直行するタイプがある。直行するタイプは3点（第10図5・6・8）あり、第10図5・8は直行するタイプの中でも口唇部が肥厚する形で、第10図5は口唇部が平坦に、同図8は口唇部が外側に丸みを帯びている。残りはすべて口縁部が外反するタイプで肥厚する資料ではなく、口唇部が平坦になっている資料と丸みを帯びている資料に分かれる。

2. 胴部資料

土器の文様は貼付突帯文または隆起線文で、器壁の厚さは4~7ミリである。第11図13・14と17の資料はもろくなっており、貼付けの一部が欠落している。

3. 底部資料

底部はくびれ平底5点、平底4点、不明2点で、尖底と思われる土器底部は一点も出土しなかった。底の器壁の厚さは大半が1.5cm~2cmであるが、資料のなかには0.4cm（第11図5・7）の薄手の土器や、3cmの厚手の土器（同図8）も出土している。

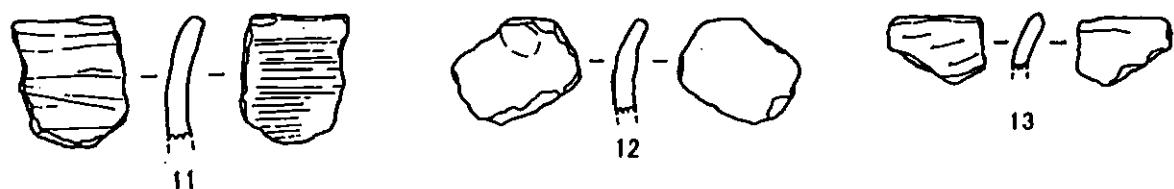
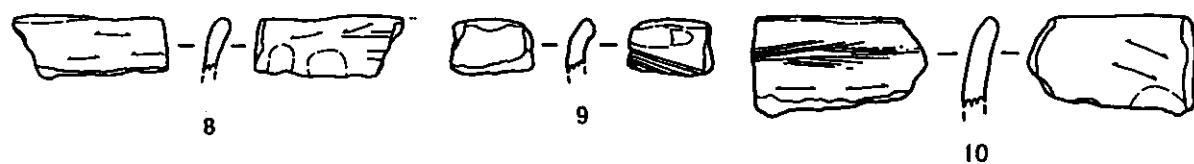
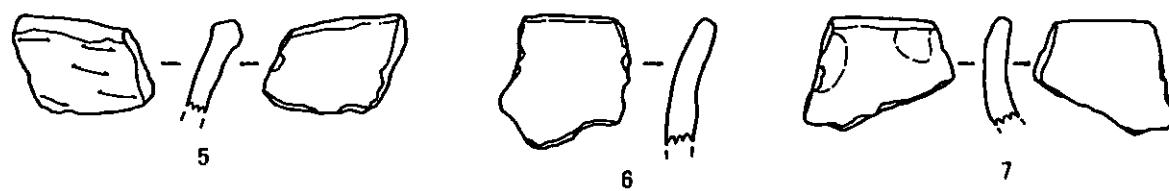
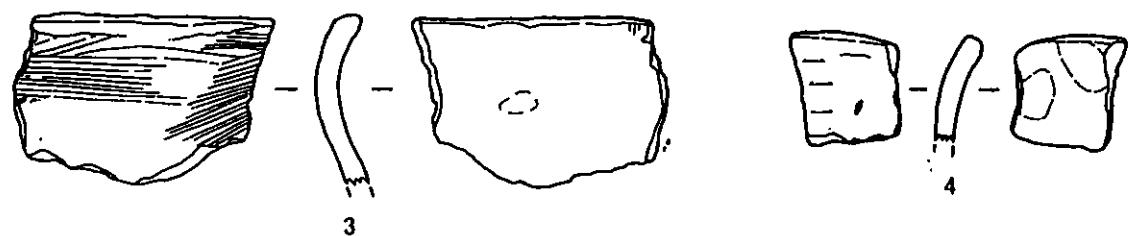
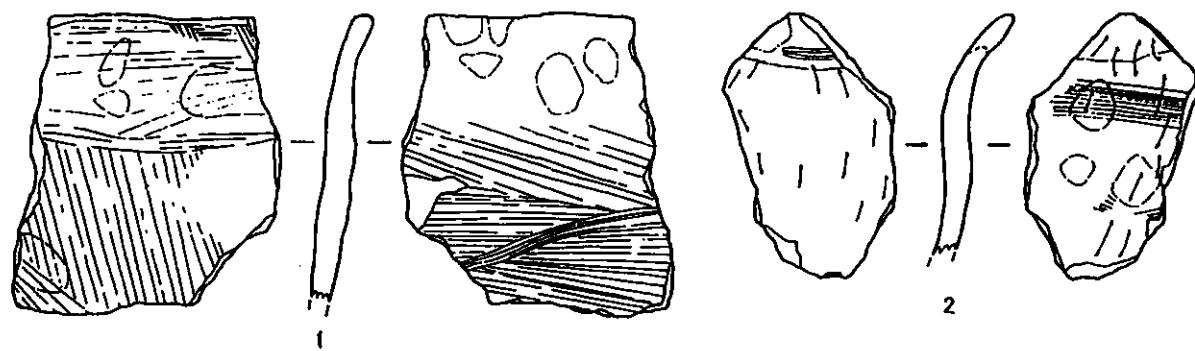
第2表 地区別土器出土表

I 地区		C-11			C-12				C-13			F-12	
		II a	III	IVd	II a	III	IVd	V	II a	III	V	I	II
無文	口縁		1			5				1			7
	胴部	2	9	1	1	55	3	1	6	31	2	1	6
	底部				1	3							4
	部位不明												
有文(沈 線・浮文or 帯)	口縁												
	胴部		1			2	1		1	2			7
	部位不明												
		2	11	1	2	65	4	1	7	34	2	1	6
													136

		D-11			D-12			D-13				
		II a	III	II a	III	IVb	II a	III	IVc	IVd	V	
無文	口縁			2					1		3	
	胴部	16	13	22	5	1	25	22	1	3	1	109
	底部	3		2				1				6
	部位不明											
有文(沈 線・浮文or 帯)	口縁											
	胴部			1			1					2
	部位不明											
		19	13	27	5	1	26	23	1	4	1	119

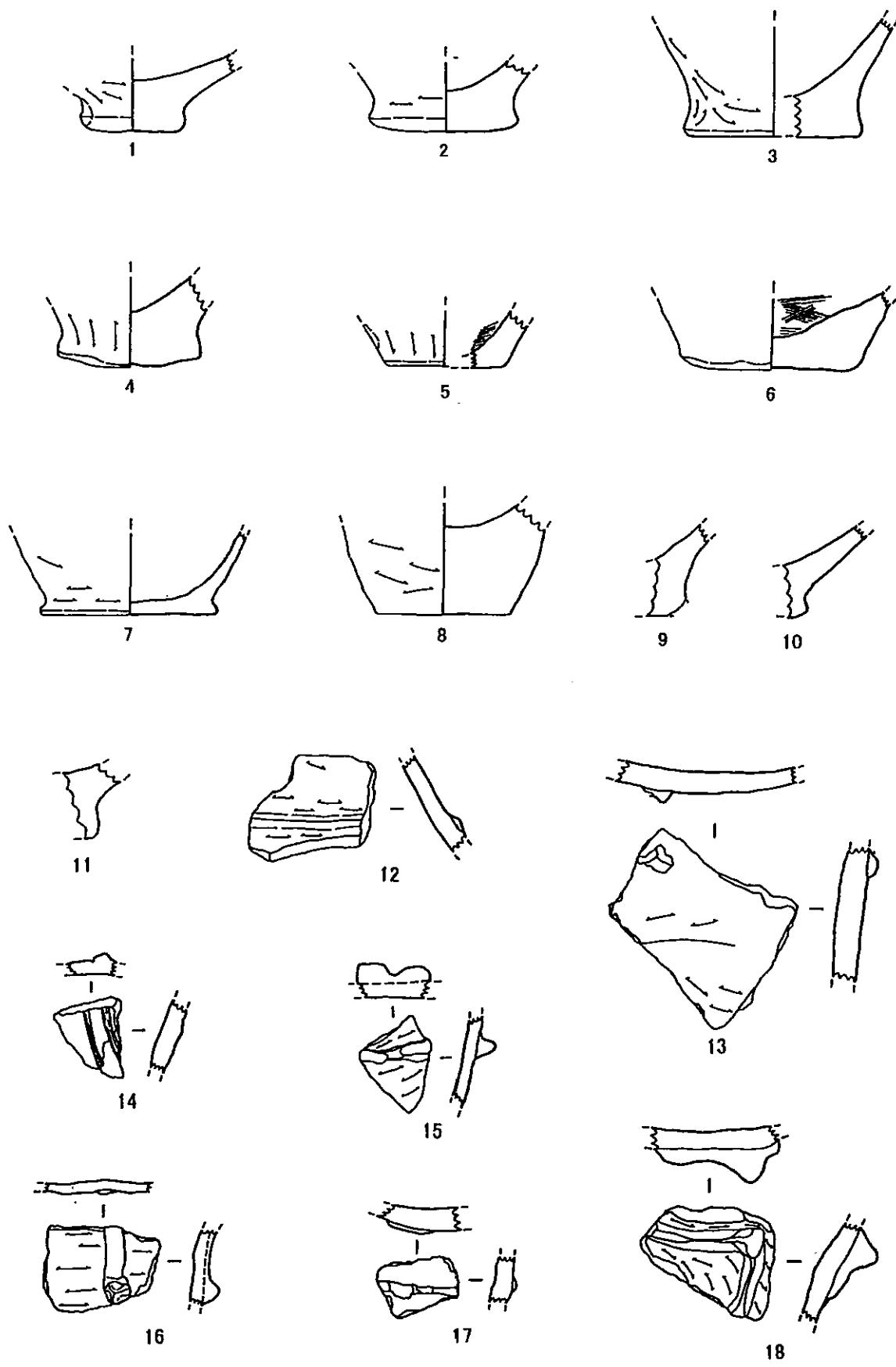
II 地区		C-6		C-7			D-8		D-9	
		IV	IIIa	IIIb	IIIc	IV	IV	IIIa	IV	
無文	口縁	5		1		1				7
	胴部	39	2		6	3	17	3	1	71
	底部	3								3
	部位不明									
有文(沈 線・浮文or 帯)	口縁									
	胴部									
	部位不明									
		47	2	1	6	4	17	3	1	81

III 地区		C-2					C-2		E-3	
		II	IIIa	IIId	IVa	IVb	II	IIIa	II	
無文	口縁		1	1				1		3
	胴部	2	8		1			9	2	22
	底部		1	1			1	1		4
	部位不明					1				1
有文(沈 線・浮文or 帯)	口縁									
	胴部									
	部位不明									
		2	10	2	1	1	1	11	2	30



第10図 土器（口縁部 1～13）





第11図 土器（底部1～11、胴部12～18）

0 10cm

第2節 石 器

石器は7点出土した。その内訳はクガニイシ形石器2点、磨石4点、砥石1点である。

1. クガニイシ形石器

クガニイシ形石器はトカラ列島から沖縄諸島までの南島北部圏・中部圏の文化圏で発見された遺物で、製粉用石器と推測され、南島北・中部の文化圏の特徴的な遺物のひとつである（註1）。

本遺跡で発見されたクガニイシ形石器はいずれも白木原和美氏のいうB型に属するものと考えられ、伊江島のナガラ原東貝塚（註2）などで報告されている。

第12図1（P.L.15の1）は緑色変岩製で、表面・裏面ともに研磨が施されている。上面に幅1.3ミリほどの帯状の平坦面が見られ角の部分は自然面になっている。下部の角の部分に叩いて使用したあとがあり、叩き石として併用して使用されたとみられる。

同図4（P.L.15の2）はひん岩製である。中央に縦3.5cm、横3cmの浅いくぼみがあることから、くぼみ石として併用で使用されたと思われる。

2. 磨 石

全部で4点出土したが、すべて破損が著しいため大きさ・形状が不明である。第12図5（P.L.15の6）は本部石灰岩製で、破損部分（側面・裏面）が著しいため、全体の形状や大きさなどは不明である。残っている面をみると、表面図の下端部に研磨痕がみられる。

同図3（P.L.15の5）は玄武岩製である。表面図の裏面・右側面・上部の破損が著しいため全体の形状・大きさは不明。全体的に研磨が施されており、左側面は叩いて使用したあとが残っている。

同図2（P.L.15の3）は緑色変岩製で、角の部分と思われるが、破損部分（表面図の左側面・裏面・上面）が著しいため、全体の形状・大きさは不明である。残っている部分（破損の割れ目以外の部分）は研磨が全体に施されている。

同図7（P.L.15の4）は変輝緑岩ないし緑色変岩製である。表面・裏面・側面は四角形で断面は台形状になっている。破損がひどく全体の形状・大きさは不明。表面・裏面は研磨されているが、側面は研磨されておらず、叩いて使用した跡がある。

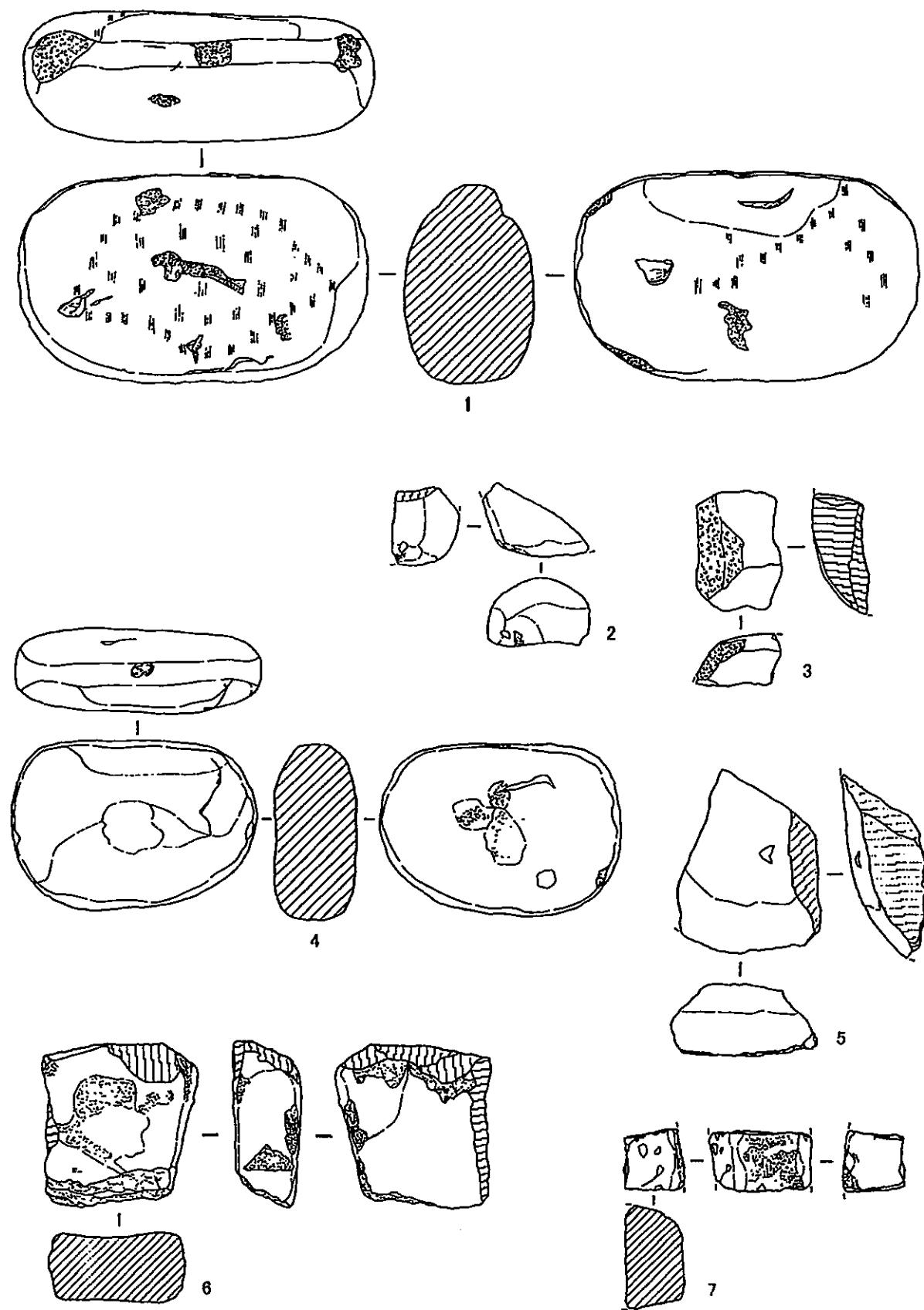
3. 砥 石

第12図6（P.L.15の7）は石英斑岩製で、表面図の上面・左側面が破損しているため全体の形状・大きさは不明。表面・裏面・右側面が研磨されている。とくに裏面はきれいに研磨が施されている。表面図の中央部・右側面に使用痕があるが、あまり使用はされていない。下面是自然面である。

引用文献

註1 白木原和美 「クガニイシ」『法文論叢』41号 熊本大学法文学会 1978年

註2 『考古学研究室報告 第34集』 熊本大学文学部考古学研究室 1998年



第12図 石器

0 10cm

第3節 貝製品

本節で扱う資料は、貝製品および製作途中の未製品と考えられるものを主とし、これまで県内の各遺跡において製品として報告されている資料に類似するものを図示した。

1. ゴホウラ

ゴホウラは琉球列島のサンゴ礁海域に生息する大型巻貝の一種である。このゴホウラは、弥生時代前期後半（今から約2200年前）から使い始めたとされる南海産貝輪（腕輪）の素材となるものである。

第13図1は螺背面から結節部・螺腹部にかけ欠損。人為的に加工したと考えられるが、貝輪を製作するには比較的のサイズは小さい。残存重量は314 g。C-11地区第IVd層出土。

同図2は外唇部のみの資料である。188 g。C-7地区第IVa層出土。

同図3は腹面部を利用した貝輪の未製品であり、外面には研磨の痕跡が見られる。46 g。C-12地区第III層出土。

2. 二枚具有孔製品

シャコガイ科を主体とする二枚具有孔製品は、殻頂部に穿孔を施すものであり、その用途は貝錘（漁網錘）として想定されている。第14図1～4、大小4点を図示したが、ヒメジヤコが多く見られる。

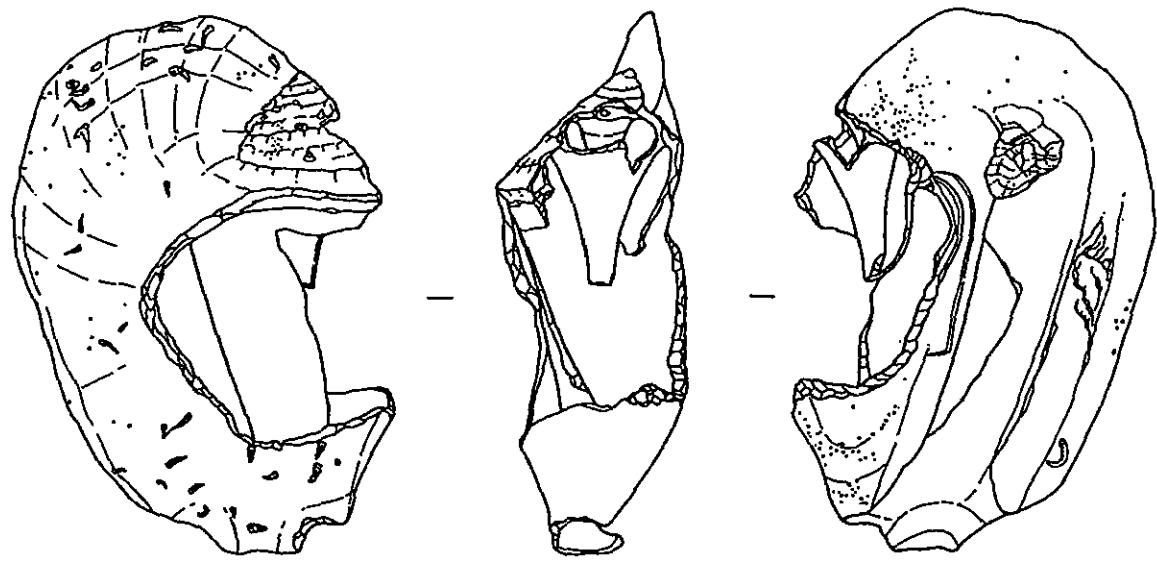
3. その他

上記の他にヤコウガイやタカラガイ・イモガイ等の資料を図示しているが、これらは当初製品の可能性があるものとして取り扱っていた。ところが、沖縄県立埋蔵文化財センターの島袋春美氏に見て戴いたところ、人為的な加工痕および使用痕がないことから、これらは製品である可能性が低いとの所見をいただいた。

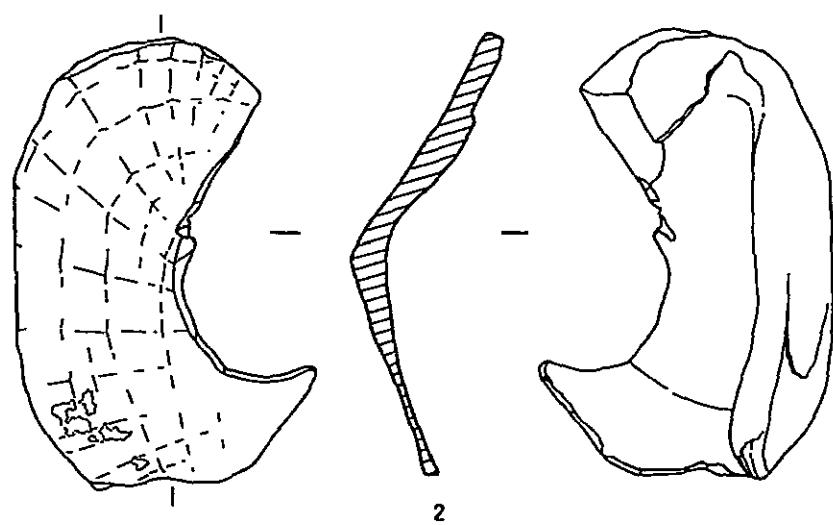
なお、第15図7～9のオニノツノガイ科、同図6のヒメイトマキボラには体層部から螺塔部にかけて一方向のみ擦り減る特徴が見られる。しかし、これらについても人為的なものではないことから、ヤドカリ類の宿貝としての使用痕である可能性が高い。資料として興味深いことから、第9節にて集計と分類を試みた。

参考文献

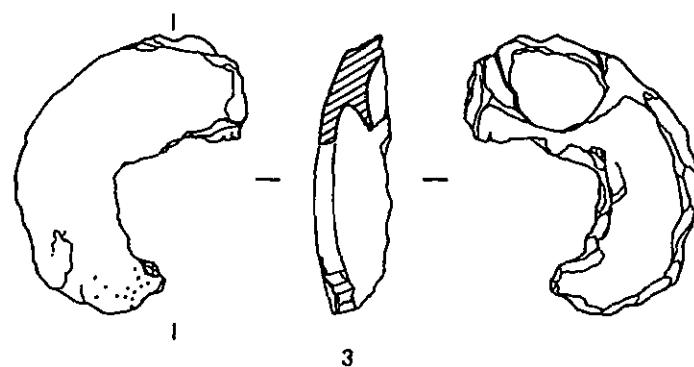
- 木下尚子 「南島貝文化の研究」 法政大学出版局 1996年
大城 慧 「貝錘について－考察－後期貝塚出土資料の場合」『沖縄県教育委員会文化課紀要第4号』
沖縄県教育委員会文化課 1987年
島袋春美 「県内出土の「タカラガイ製品」について」『南島考古 No16』 1997年



1



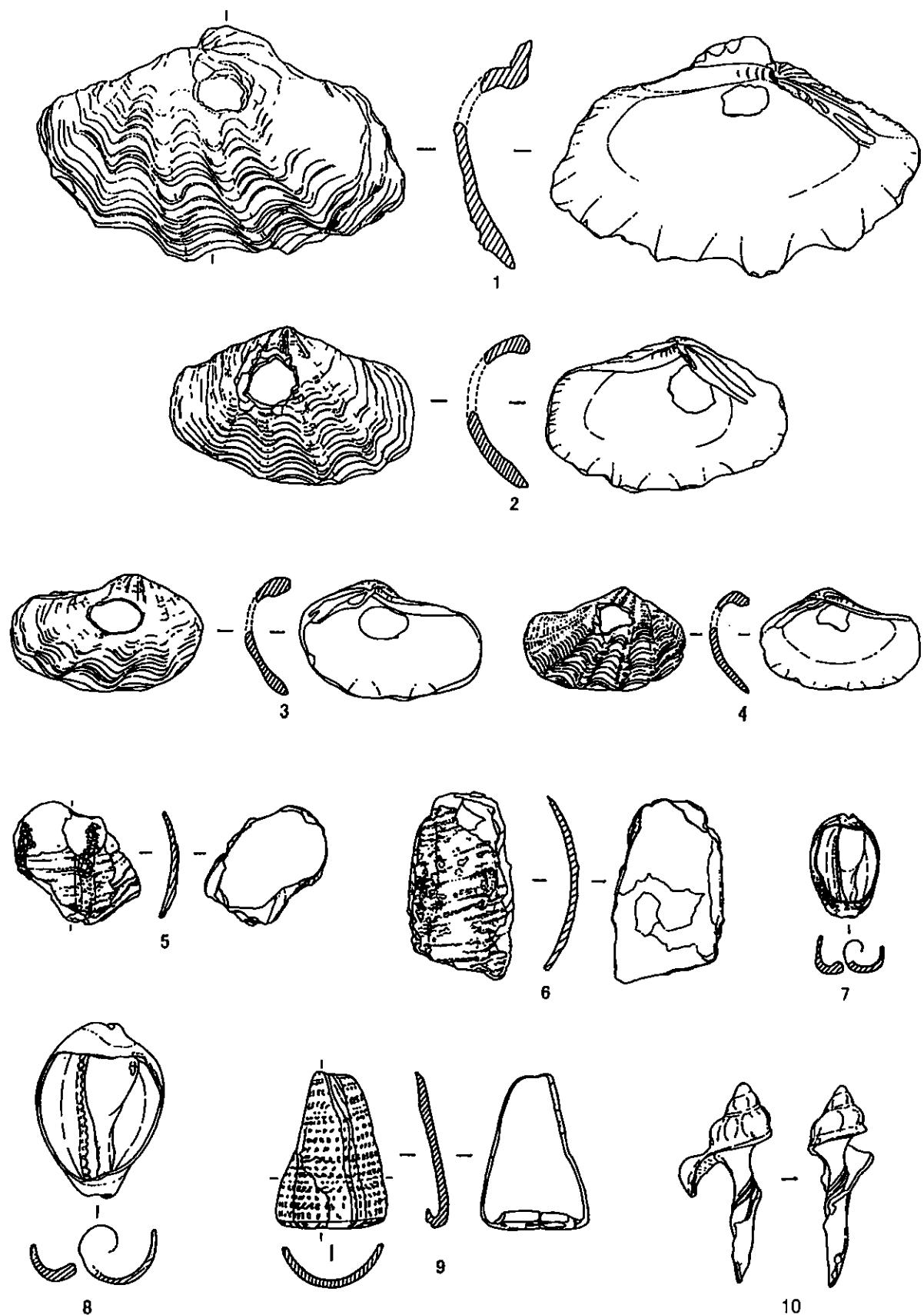
2



3

第13図 貝製品 1

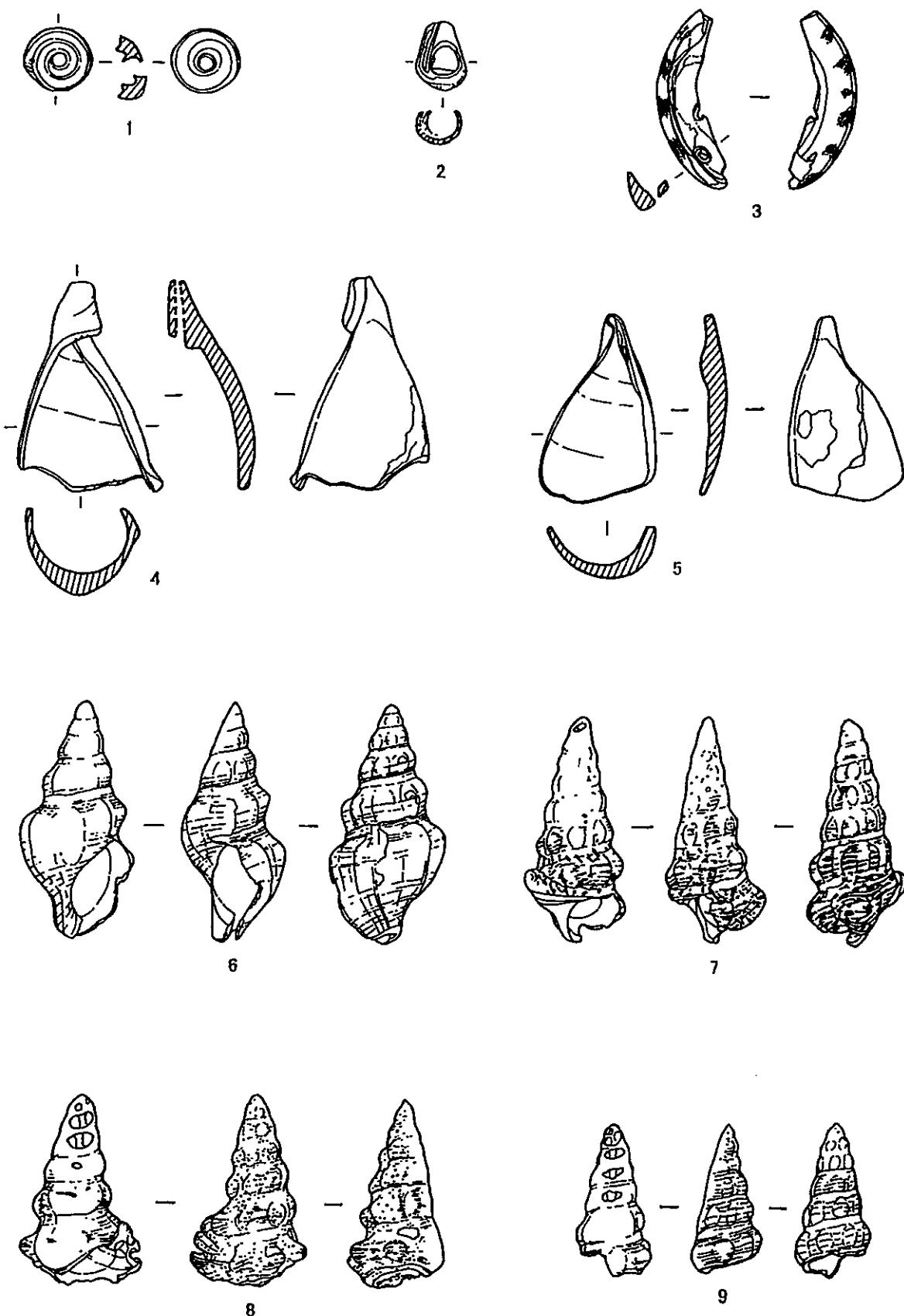




第14図 貝製品2

(1~4) シャコガイ科、(5・6) ヤコウガイ科、
(7・8) タカラガイ科、(9) イモガイ科、(10) イトマキボラ科

0 10cm



第15図 貝製品3 (1・2) イモガイ科、(3) サラサバティ、
(4・5) スイショウガイ科、(6) ヒメイトマキボラ、(7~9) オニノツノガイ科

0 10cm

第4節 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器とは、器の表面に釉薬を施す陶器の一群をさす。沖縄では一般的に「ジョウヤチ」とも称されている。本貝塚から検出された資料には、碗・鉢・酒注・火入・瓶・煙管などがある。以下、それぞれの器種について記述する。

1. 碗

I類 高台脇から口縁部にかけて、ほぼストレートに立ち上がる器形である。釉掛けは、内外面の上半分のみを対象に行う「フィーガーキ」と称される技法を用いており、器の下半部である見込みや高台は露胎となる。(第16図1)

II類 高台脇から口縁部へかけて緩やかなカーブを描きながら膨らみ、口縁部は微弱な外反をなす器形である。I類よりも施釉範囲は広がり、高台脇までおよび内外面を異なる2種類の釉薬で掛け分けを行っている。内器面には二重の同心円文を描き、見込みは蛇の目状になる。(第16図2)

III類 口縁端部が外に開き、施釉範囲は高台までおよぶ。II類と同様に内外面で掛け分けを行い、見込みは蛇の目状になるが二重の同心円文はみられない。(第16図3)

IV類 口縁部の形体は不明であるが、内外面とも同一の釉薬を施し、見込みは蛇の目状をなす。(第16図4)

2. 火取(火入)

俗に「ヒートウイ」と呼ばれる煙草の火種入れである。腰部で大きく屈曲したあと口縁部へ垂直に立ち上がる筒状の器形と考えられる。(第16図5)

3. 酒注

注口を持つ有頸の容器、いわゆる「カラカラ」を称される酒器である。(第16図6・7)

4. 鉢

「ワンブー」を称される鉢である。口縁部が外に開き、断面が三角形状に肥厚する。底部資料は得られていない。(第16図8)

5. 瓶

図示した口縁部1点のみの出土である。口縁部から頸部下位にかけ黒褐色の釉薬を、頸部下位から肩部には飴色の釉薬を施す掛け分けが見られる。(第16図9)

6. 煙管

煙管の煙草を入れる部分である雁首が1点得られた。外面には明オリーブ灰色の釉薬がかかる。(第16図10)

第3表 沖縄産施釉陶器所見一覧表

挿図番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素 地	色 調	特 徴	出土地点
第16図1 PL.10の1	碗 I類	12.6 6.1 6.2	灰白色 Hue7.5Y,7/1	内外面：明オリーブ灰色 Hue2.5GY,6/1	高台及び内底面には、砂粒や重ね焼きの目跡はみられない。	D-11地区 Ⅲ層
第16図2 PL.10の2	碗 II類	13.2 6.0 6.9	にぶい黄橙 Hue10YR,7/3	外面：黒褐色 Hue10YR,3/1 内面：灰白色 Hue2.5Y,6/2	内底面に二重の同心円文を描き、中央部は蛇の目状をなす。重ね焼きの跡が残る。	D-11地区 Ⅱa層
第16図3 PL.10の3	碗 III類	13.2 6.5 6.3	にぶい黄橙 Hue10YR,7/4	外面：黒褐色 Hue5YR,2/2 内面：灰白色 Hue7.5Y,7/1	内面に釉薬を施した後、見込み周辺部をふき取り蛇の目状になる。高台外面には窯積めの際の耐火土が残る。	D-11地区 Ⅲ層
第16図4 PL.10の4	碗 IV類	— — 5.6	灰白色 Hue10Y,8/1	内外面：灰白色 Hue7.5Y,7/1	内外面ともに灰白色の釉薬が施され、見込みは蛇の目状の釉剥ぎを行う。	D-11地区 Ⅲ層
第16図5 PL.10の7	火取	— — 5.5	灰白色 Hue2.5Y,8/2	内外面：灰白色 Hue7.5Y,7/2	内外面に釉薬を施すが、底部までは至らず高台部は露胎となる。一部に黒褐色の釉薬が付く。	D-11地区 Ⅲ層
第16図6 PL.10の5	酒注	— — 7.3	灰白色 Hue5Y,7/2	外面：黒色 Hue5YR,7/1	施釉は高台外面で止まり、壺付・高台内は露胎となる。壺付に砂目跡が残る。	D-11地区 Ⅲ層
第16図7 PL.10の6	酒注	— — 7.7	灰黄色 Hue2.5Y,6/2	外面：黒色 Hue2.5YR,2/1	“	D-11地区 Ⅲ層
第16図8 PL.11の2	鉢	— — —	灰白色 Hue10Y,7/1	外面：黒褐色 Hue5YR,3/1 内面：浅黄色 Hue7.5Y,7/3	外面を異なる釉薬により掛け分けを行っている。内面には絵付けを行ったような跡が見られる。	D-11地区 Ⅲ層
第16図9 PL.11の1	瓶	3.7 — —	にぶい赤褐色 Hue5YR,5/3	外面：黒色 Hue7.5YR,2/1 内面：暗オリーブ褐色 Hue2.5Y,3/3	頸部を境に掛け分けを行っている。	D-11地区 Ⅲ層
第16図10 PL.10の8	煙管		灰白色 Hue2.5GY,8/1	外面：明オリーブ灰色 Hue2.5GY,7/1	羅字接続部を1/2ほど欠損。火皿内径1.2cm、全長3.1cm。	D-13地区 Ⅳd層

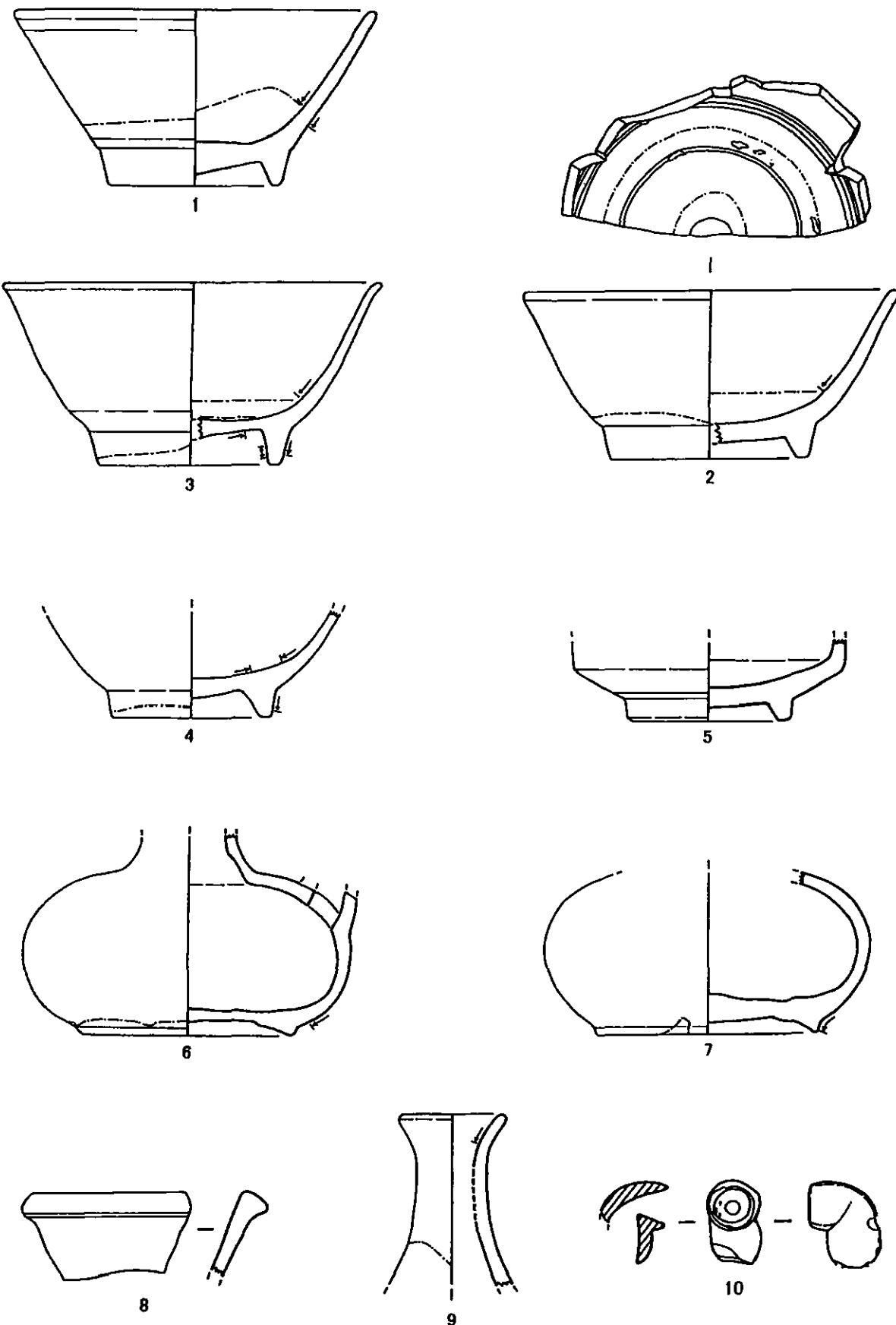
参考文献

知念 勇・池田栄史・江藤和幸 1988年 「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」

【沖縄県立博物館紀要 第14号】

池田栄史・津波古 聰 1991年 「灰釉碗の話」【沖縄県立博物館紀要 第17号】

那覇市教育委員会 1992年 「壺屋古窯群Ⅰ」 那覇市文化財調査報告書第23集



第16図 沖縄産施釉陶器

第5節 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器とは、沖縄で生産された上薬を掛けない焼き締めの陶器であり、一般的に「アラヤチ（荒焼）」と称されている。本遺跡からは擂鉢、壺が検出されており、器種は少ない。

1. 擂鉢

擂鉢は図示した2点の底部資料のみであり、口縁部は得られていない。

第17図1は、にぶい赤褐色（2.5YR、4/4）を呈し、焼成が良い。内面には10～12条を一組とする擂目が隙間なく施される。底径9.0cm。D-11地区第Ⅲ層出土。

同図2は、橙色（2.5YR、6/8）を呈し、図1に比べ胎土は軟質である。内面には11～12条を一組とする擂目が隙間なく施されるが、見込み部は擂目が磨滅している。底径8.6cm。D-11地区第Ⅲ層出土。

2. 壺

同図3 肩部の張りが緩やかで、頸部から口縁部にかけて朝顔状に外反する壺である。口縁部がやや肥厚し、口唇端部が尖る。肩部に8条と1条の凹線を廻らせ、両線の間にヘラ削りによる文字が見られるが、欠損により判読できない。口径12.9cm。C-11地区第Ⅲ層出土。

図4 外面は暗赤褐色（2.5YR、2/3）、内面は暗青灰色を呈する。底径8.6cm。D-11地区第Ⅲ層出土。

同図5 外面は暗褐色、内面は暗赤褐色（2.5YR、3/4）を呈する。底径12.4cm。C-11地区第Ⅲ層出土。

同図6 大型壺の底部資料である。外面は明赤褐色、内面は橙色を呈する。底径15.1cm。C-11地区第Ⅲ・Ⅳd層出土。

第4表 沖縄産無釉陶器出土一覧表

		C-7	C-11			C-13	D-11		D-12		D-13		計
		Ⅲc層	Ⅲ層	Ⅳb層	Ⅳd層	Ⅱa層	Ⅱa層	Ⅲ層	Ⅲ層	Ⅳb層	Ⅲ層	Ⅳd層	
擂鉢	底部		3										3
	口縁部							3					3
	胴部	3	1	1	2	2	10	53	1	1	1	1	76
壺	底部							6					6
	計	3	4	1	2	2	10	62	1	1	1	1	88

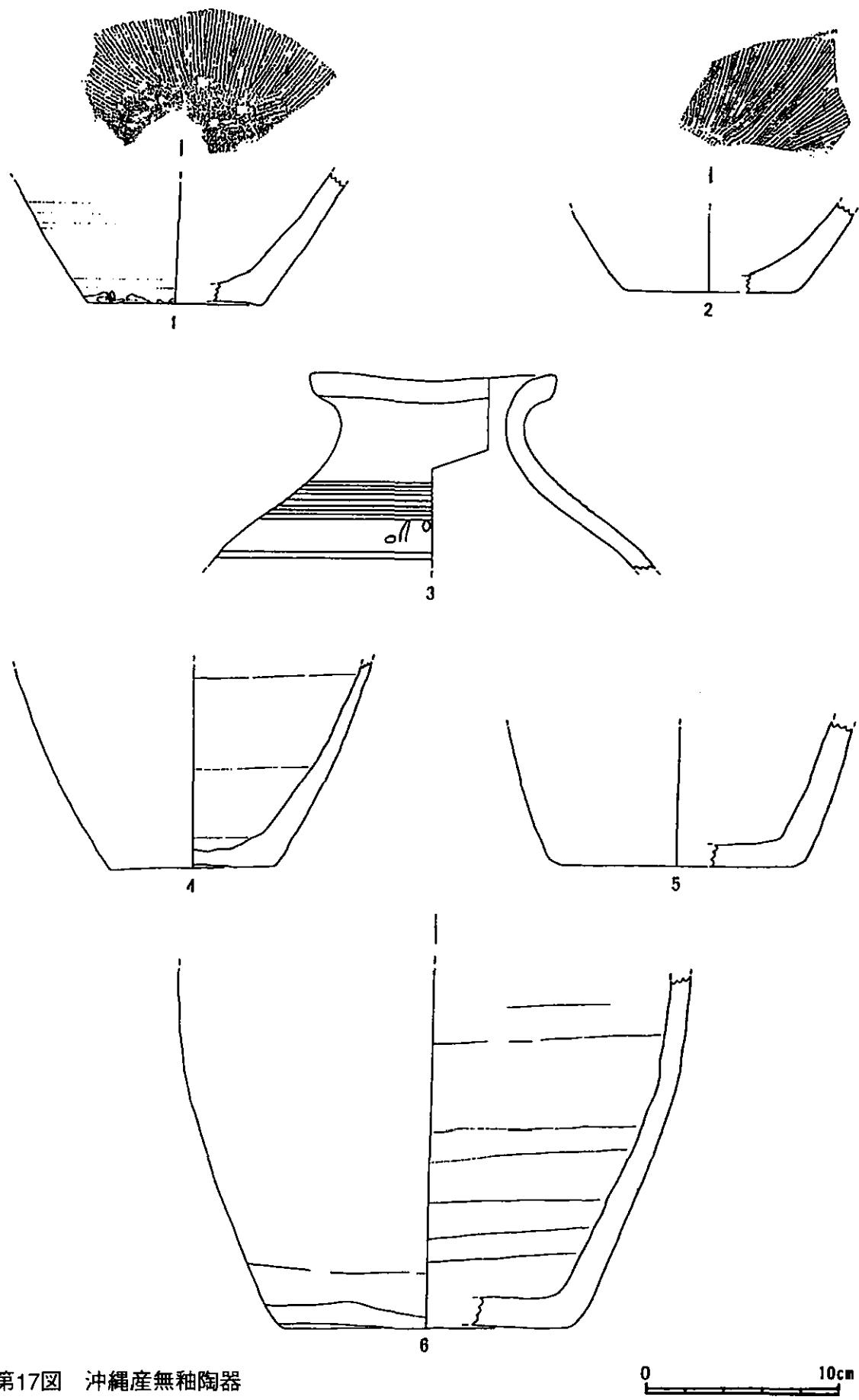
参考文献

安里進・上原政昌・家田淳一「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」

名護博物館紀要『あじまあ3号』1987年

那覇市教育委員会「壺屋古窯群Ⅰ」 那覇市文化財調査報告書第23集 1992年

九州近世陶磁学会 「九州陶磁の編年」 2000年



第17図 沖縄産無釉陶器

第6節 陶質土器

陶質土器とは、壺屋で焼かれた焼き物の種類の1つで、「アカムン」と称されている一群である。焼成温度は約600℃、陶土にはジャーガルと島尻マージにニービ（細粒砂岩）を混ぜたものが使われている。器面は橙色を成し、手に触ると粉末が指に残る。器種は土鍋・土瓶・火炉などが知られているが、本貝塚から出土した資料はすべて土鍋である。

1. 土鍋

第15図に図化した2点の資料を示した。壺屋で「サーク」と呼ばれている把手付きの土鍋である。ロクロ成形によって仕上げられ、器壁が3~5mmと薄く橙色を呈する。器形は口縁部を「く」の字状に折り曲げ、下部に向か緩やかに膨らみながら丸底の底部を成す。底部には煤の付着が顕著に見られる。

第18図1は口径17.0cm、橙色（5YR、7/8）。D—11地区第Ⅱa層の出土である。

第18図2は口径14.2cm、橙色（5YR、7/8）。D—11地区第Ⅲ層の出土である。

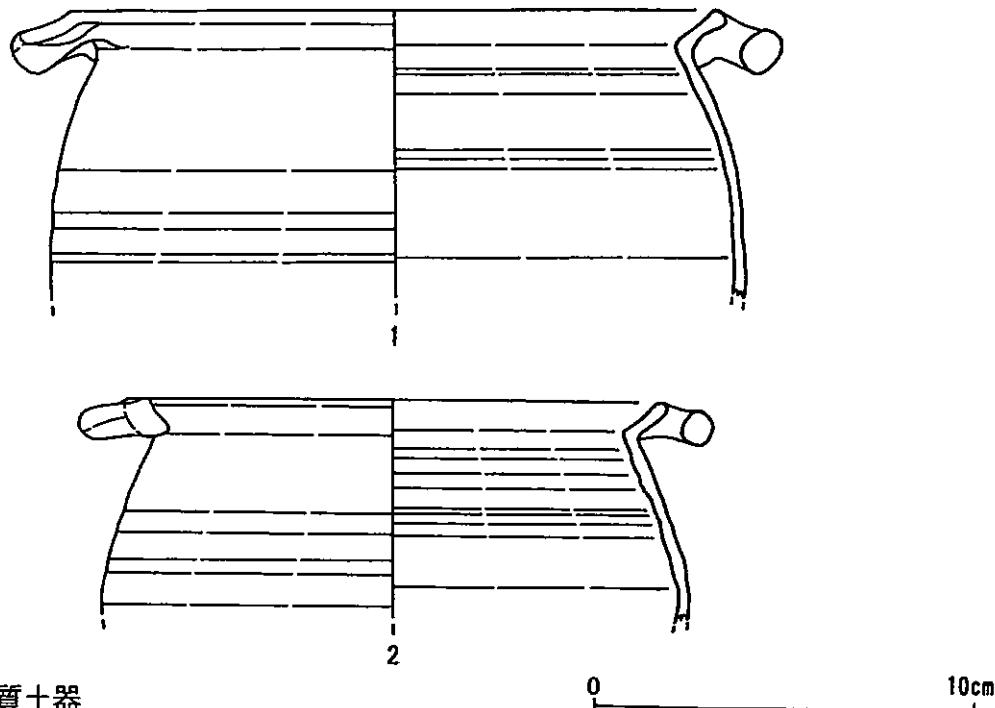
第5表 陶質土器出土状況

部位	C-11			C-13	D-11			D-12	計
	III	III d	IVa	II a	II a	III	IVa	III	
口縁部			1		1	16	1		19
胴部	1			1	19	20		1	42
底部		1			3	7			11
計	1	1	1	1	23	43	1	1	72

参考文献

那覇市立壺屋焼物博物館 「壺屋焼物博物館 常設展ガイドブック」 1998年

那覇市教育委員会 「壺屋古窯群Ⅰ」 那覇市文化財調査報告書第23集 1992年



第18図 陶質土器

第7節 タイ産褐釉陶器

C-11・D-11地区から沖縄産の陶器類とともにタイ産の褐釉陶器片が出土した。タイ産褐釉陶器は、頸部と肩部の間に耳をつける四耳壺である。便宜上大型壺と中型壺に大別したが、それぞれ1個体と考えられる。

1. 大型褐釉壺

大型褐釉壺の破片はD-11地区Ⅲ層を中心とし15点検出されたが、すべて胴部片であるため実測図の掲載は省略した。胴部片の厚みが10mmを越えることや、胴部下位で施釉が止まることから、県内のグスク跡や古集落遺跡から出土例の多いタイ産の大型褐釉四耳壺であることがわかる。

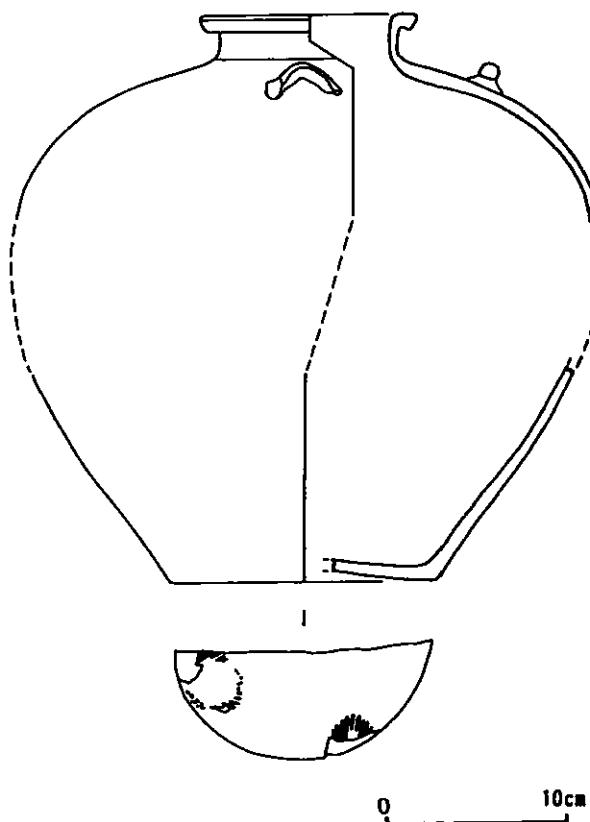
2. 中型褐釉壺

出土状況は上記の大型褐釉壺と同様である。口縁部が外に開き、肩の張る四耳壺である。器壁は薄く、頸部から肩部に至る最も厚い部分で8mmを、肩の張った最も薄い部分で4mmを測る。口縁部の外側から胴部の下位まで釉薬を施すが、釉薬が薄く境は不明瞭である。外器面は褐灰色(7.5YR,6/1)、内器面はにぶい赤褐色(2.5YR,5/3)をなす。胎土は赤褐色(2.5Y,R4/8)をなし、粒子が粗く黒色の細粒子を含む。

外底面の特徴として2カ所に窯詰めの際の目跡がみられる。その形体から放射肋を持つ二枚貝を用いたと考えられる。口径12.2cm、底径15.1cm、器高約30.0cm。

第6表 タイ産褐釉陶器出土状況

出土地点	大型壺	D-11		D-12	C-11	計
		IIa層	III層	III層	IV層	
口縁部	大型壺	1	10	4	0	15
	中型壺	3	0	0	0	3
胴 部	大型壺	10	17	1	1	29
	中型壺	0	2	0	0	2
計		14	29	5	1	49



第19図 タイ産褐釉陶器

第8節 骨類

今回は、分類・動物種の同定を行うことができなかつたため、写真のみの掲載にとどまつた。

第9節 貝類

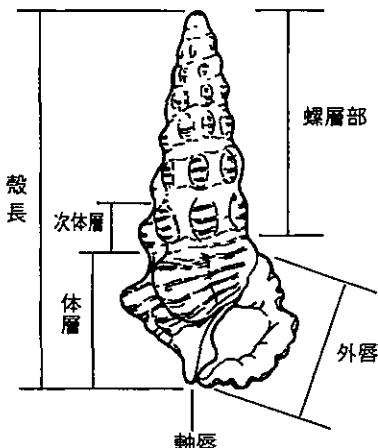
本節では本来貝塚から出土する貝類（自然遺物）を食料残滓ととらえ、これらを分類・集計することにより、そこを生活の場としていた過去の人々の食生活を一部復元しようとするものである。しかし、本貝塚において調査区すべてが攪乱を受けているため、その目的を果たす事はできないが、出土した貝類のなかに興味深い資料があるため、今後の参考になればと思いオニノツノガイ科とヒメイトマキボラの資料について紹介する。

1. オニノツノガイ科

本貝塚から出土するオニノツノガイ科には、螺塔部から体層部に至り一方のみがすり減るというもの（第15図に図示）が見られた。当初は人為的な加工・使用痕とみなし人工遺物として取り上げを行っていたが、人工品とするには用途が不明なことや、類例資料が殆どないことから疑問が生じた。唯一の類例として、本部町字崎本部の兼久原貝塚（註1）出土のオニノツノガイ科1点が貝製品として扱われている。

県内の報告書を頼りに調べていくと、黒住耐二（1987年）の報告例や当山昌直・島袋春美氏の助言により、オカヤドカリ類の宿貝としての使用痕であることが分かった。そこで、本貝塚から検出されたオニノツノガイ科を全て抜き出し、宿貝としての利用頻度を調べるとともに使用痕をもつものについて破損状態から若干の分類を試みた。

その結果、76点のオニノツノガイ科が検出され、その内71%にあたる54点に宿貝としての使用痕が認められた。これら使用痕を持つ54点を対象に破損状態による分類を行うと、下記の4類に分けることができた。



- | | |
|---------------------------------|-----|
| I類：外殻に破損はなく、体層内壁を欠くもの。…………… | 2点 |
| II類：軸唇・外唇が破損し、体層内壁を欠くもの。…………… | 6点 |
| III類：体層部まで破損が及び、体層内壁を欠くもの。…………… | 6点 |
| IV類：次体層以上を破損し、体層内壁を欠くもの。…………… | 40点 |

これら分類の前提条件として外殻に見られる使用痕を挙げたが、分類・観察の結果により破損状態（残存形態）に関わらず使用痕を持つこと・体層内壁を欠くことがオカヤドカリ類の宿貝利用の痕跡と考えられる。

なお、使用跡が見られない残りの22点についても観察をおこなったが、体層部や外

唇・軸唇に破損が見られるものの、体層内壁を欠くものはなかった。

2. ヒメイトマキボラ

オニノツノガイ科以外に同様の使用跡が認められたものにヒメイトマキボラがある（第15図6）。出土したヒメイトマキボラにおいて、オカヤドカリ類の使用痕を持つ物がどれくらいの割合であるのか算出は行っていないが、6点が確認された。オニノツノガイと同様に、螺塔部から体層部にかけて使用痕を持ち、体層内壁を欠くことが特徴である。しかし、この6点のうち軸唇を破損しているものは1点のみであり、体層部や外唇部においてもオニノツノガイ科に比べ破損の程度は低い。

3. 小 結

今回、オニノツノガイ科とヒメイトマキボラにおけるオカヤドカリ類の宿貝利用を紹介したが、その他の貝種においても詳細に観察を行えばオカヤドカリ類の宿貝利用が確認されるはずである。貝塚から出土する貝類にオカヤドカリ類の使用痕が見られる例は、本部町の具志堅貝塚出土資料をもとに既に黒住氏により報告されている（1987年）。氏が同報告の「考察」にて述べられているように、貝塚から出土する貝類が食料残滓であるか否かに加え、オカヤドカリ類による持ち込み、貝製品としての利用目的、あるいはそれ以外の目的による存在であるかを考慮に入れ、分類・集計を行う意義を考えなければならない。

引用文献

註1 本部町教育委員会 「本部町の遺跡－詳細分布調査報告書－」本部町文化財調査報告書第7集1991年
参考文献

- 黒住耐二 「オカヤドカリ類と宿貝との関係」「あまん」沖縄県天然記念物調査シリーズ 第29集
オカヤドカリ生息実態調査報告 沖縄県教育委員会 1987年
- 黒住耐二 「第6章 自然遺物」「知場塚遺跡」本部町文化財調査報告書第5集 本部町教育委員会 1988年
- 平田義浩 仲宗根幸男・諸喜田茂充 「沖縄の貝・カニ・エビ」 風土記社 1988年
- 奥谷喬司 「日本近海産貝類図鑑」 東海大学出版会 2000年



第20図 部瀬名貝塚調査地点

第VI章 結語

今回実施された発掘調査は、国道58号・部瀬名線道路線形改良事業に伴う緊急発掘調査です。部瀬名貝塚は8年前の1992年にもブセナリゾート開発に伴う発掘調査が行われています。その時の調査では、沖縄貝塚時代後期（今から約2000～1500年前）の土器を主とし、石器・貝製品等が多数出土し、ゴホウラとイモガイが積み重なった状態で検出されました。なかでも、在地土器（沖縄産）とともに南九州（鹿児島産）の弥生土器が出土し、南九州弥生人との交流を裏付けるなど沖縄の先史時代研究において最も低迷している貝塚時代後期文化の一端を示すことができました。このような前回の調査成果を念頭に置き、部瀬名貝塚の時代的位置づけや文化内容をより明らかにできるのではないかと期待し調査に臨みました。

発掘調査は客土をバックホーにより除去することから始まり、旧表土面と思われるⅡ層の暗茶褐色混礫砂層から手堀で進めていきました。ところが、沖縄貝塚時代後期の土器が出土するとともに、I地区（D-11グリット）を中心に沖縄の壺屋で製作されたと考えられる陶器類が出土した。両資料には上下の関係がなく、調査地区の断面にみられる堆積状況からも搅乱を受けていることが明らかであった。その後、調査地区を拡大し、搅乱を受けていない地点を求めたが、今回調査を行った個所すべてにおいて搅乱を受けていた。そのため貝塚時代に生活をしていた人々の痕跡を示す遺構も検出されなかった。

出土した土器はすべて貝塚時代後期に属するものであり、無文を主体とし小破片が多かった。また、1992年の調査でみられた移入土器（弥生土器）も検出されなかった。石器や貝製品も検出されたが、数が少なく良好な資料は僅かであった。

残念ながら、今回の調査区は戦後の採砂工事等により搅乱を受けた可能性が高いと考えられる。そのため、当初の調査目的を果たすことはできなかったが、発掘調査に協力してくださった多くの方々や関係機関のみなさまに深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

名護市教育委員会 「部瀬名貝塚—ブセナリゾート開発に伴う緊急発掘調査報告—」 1996年



発掘調査着手前の風景



客土除去

P L . 1



C-13 グリッド北壁断面



C-12 グリッド北壁断面

P L. 4



C-11 グリット北壁断面



F-12 トレンチ東壁断面

P L. 5



D-9 グリット北壁断面



C-6 グリット南壁断面

P L. 6



C-7 グリッド西壁断面



E-6 トレンチ東壁断面

P L.7



C-2.3 グリッド西壁断面



C-2.3 グリッド北壁断面

P L. 8



発掘調査終了時の状況

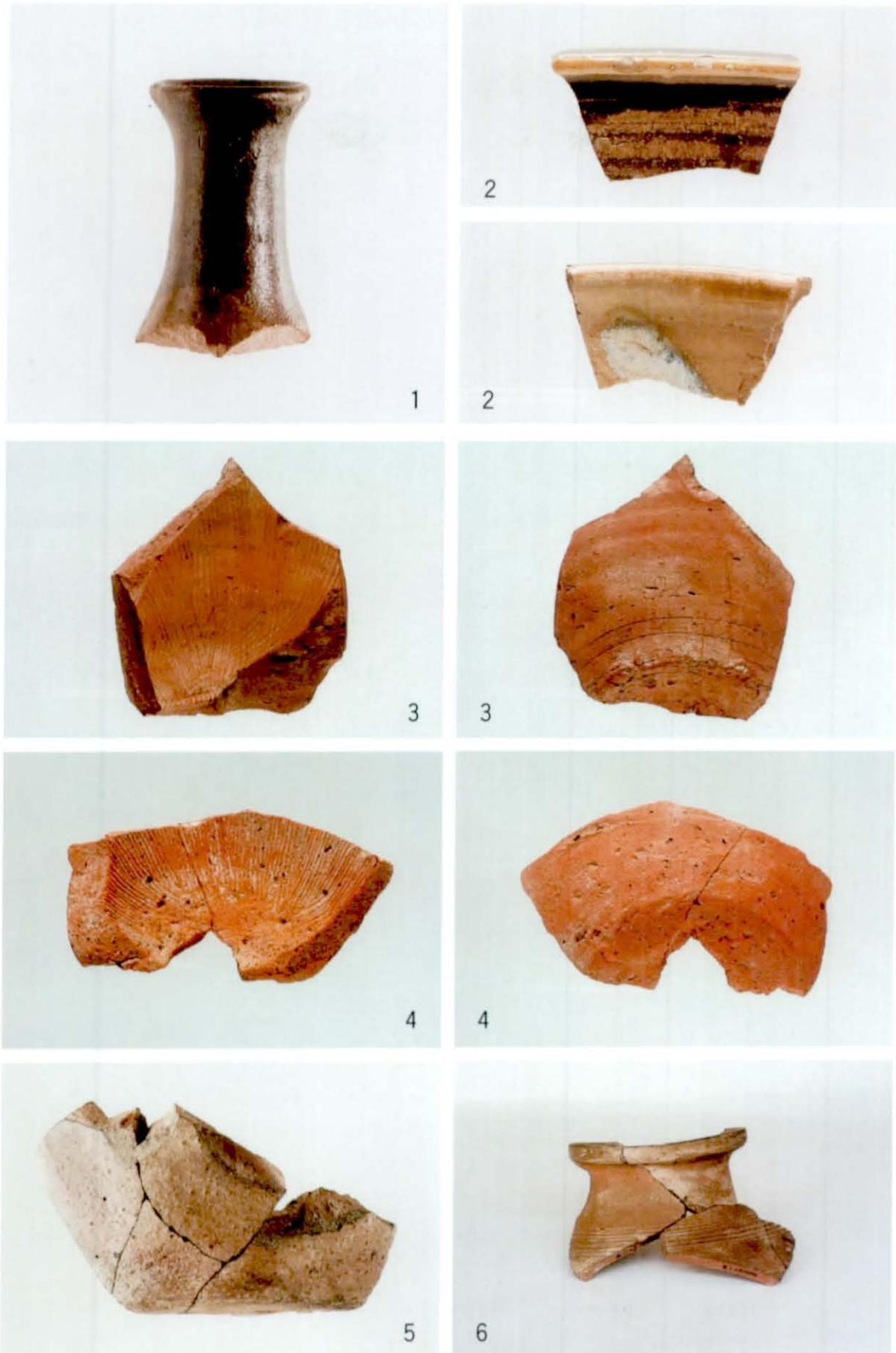


道路線形改良後の国道58号・部瀬名線

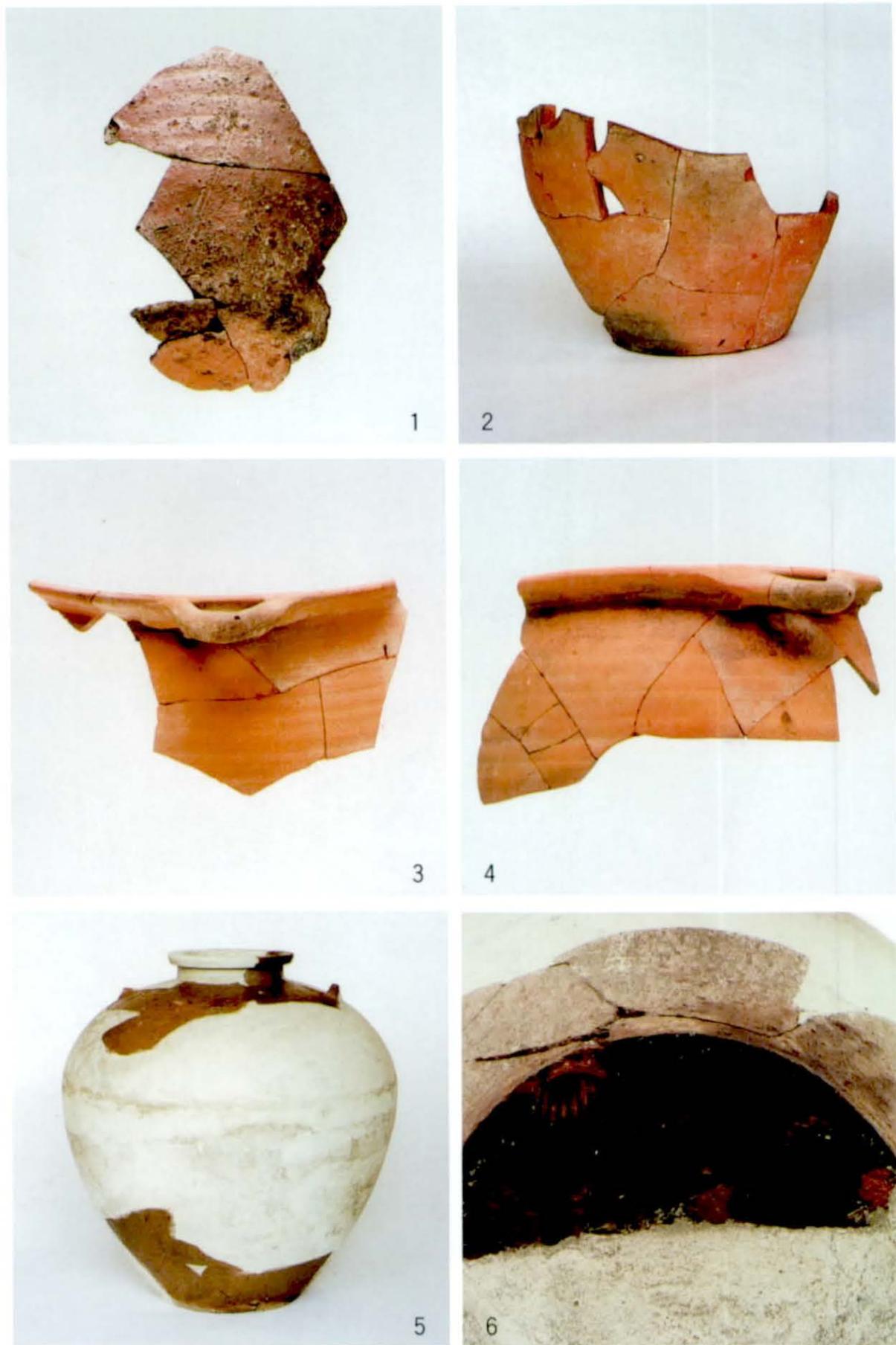
P L. 9



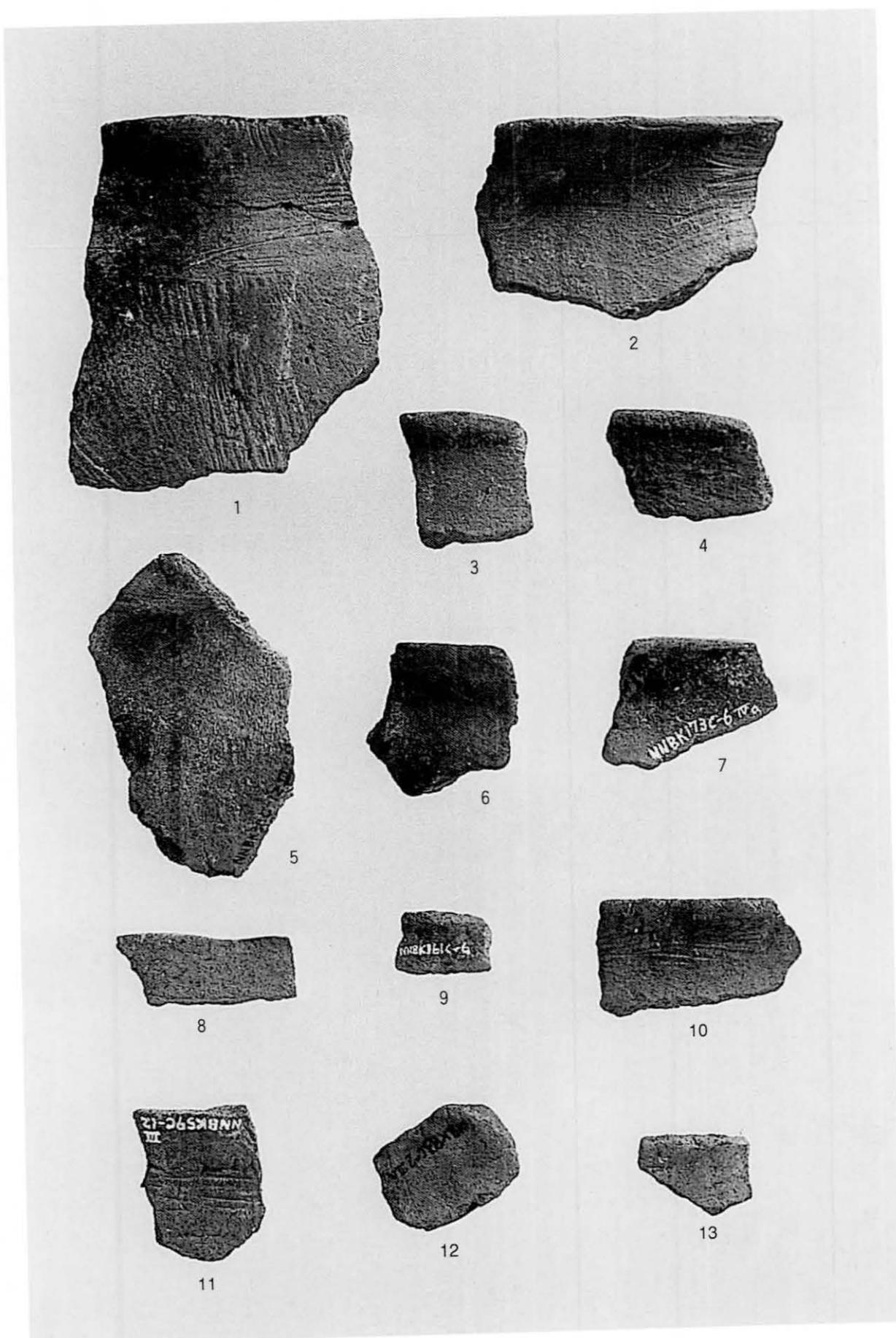
P L.10 沖繩產施釉陶器



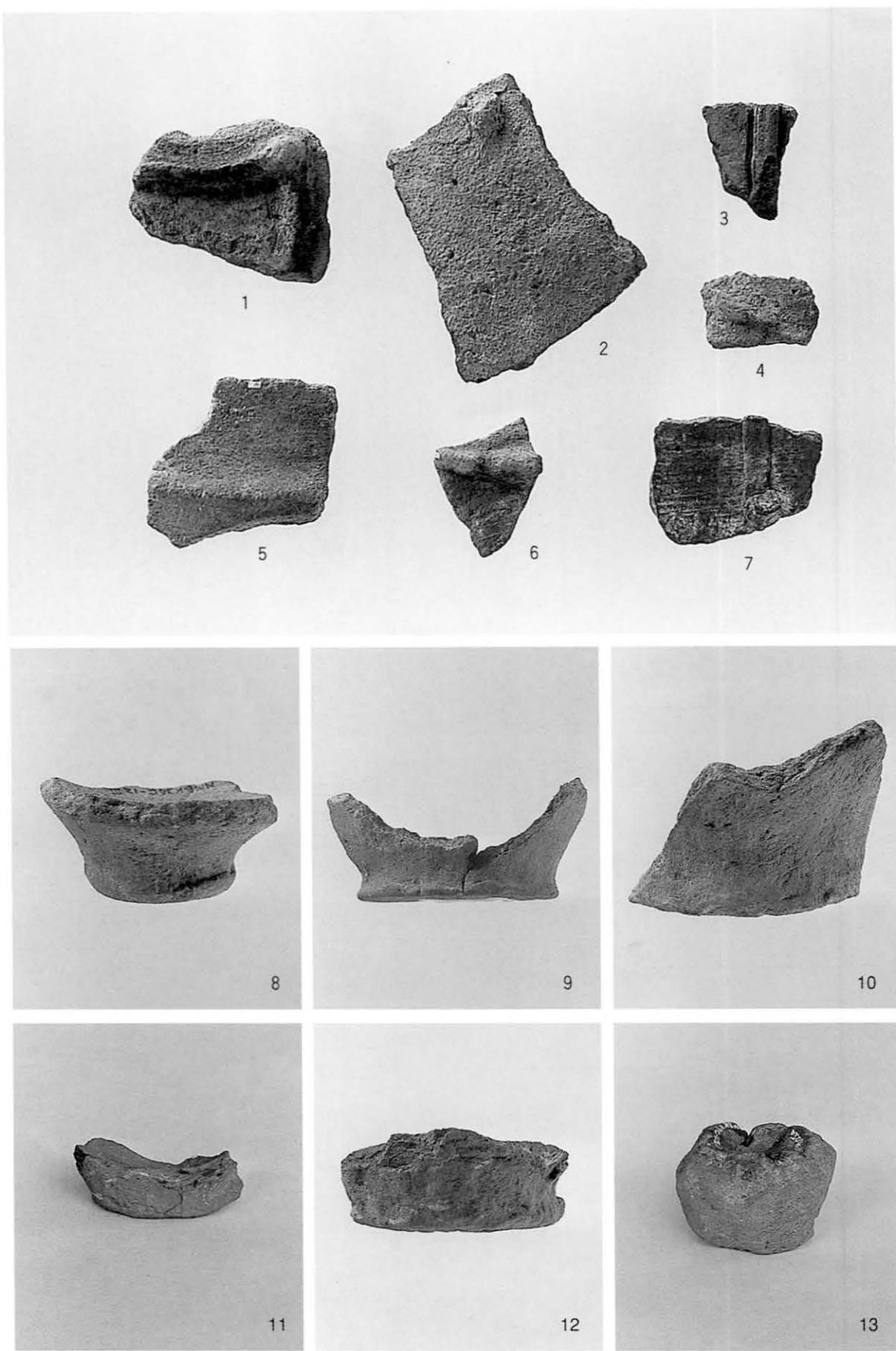
P L.11 沖縄産施釉陶器（1～2）沖縄産無釉陶器（3～6）



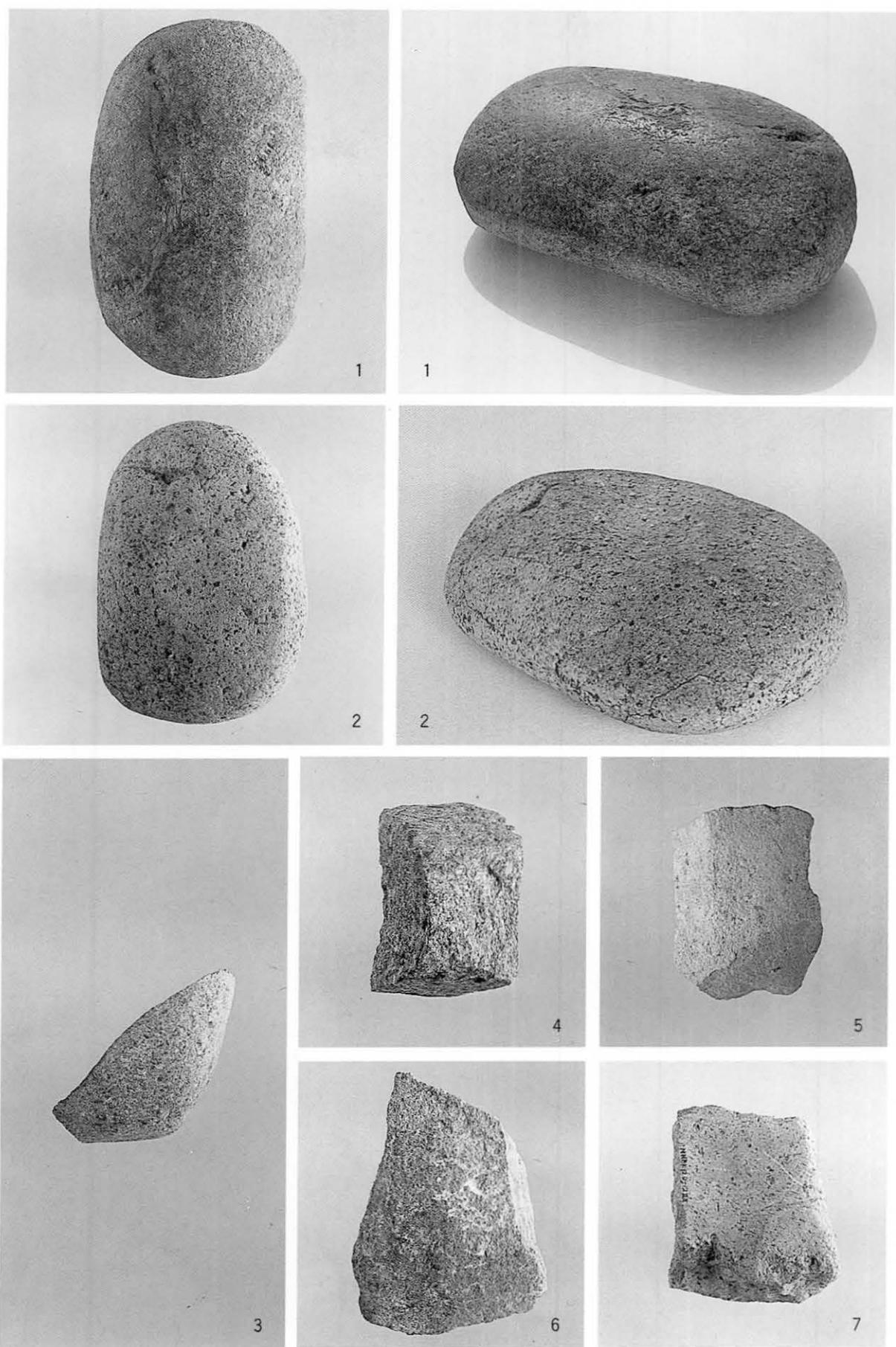
P L.12 沖縄産無釉陶器（1・2）、陶質土器（3・4）、タイ産褐釉壺（5・6）



P L.13 土器



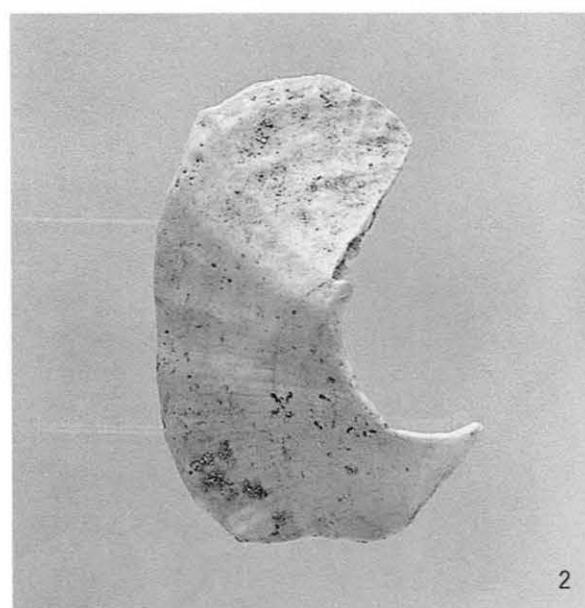
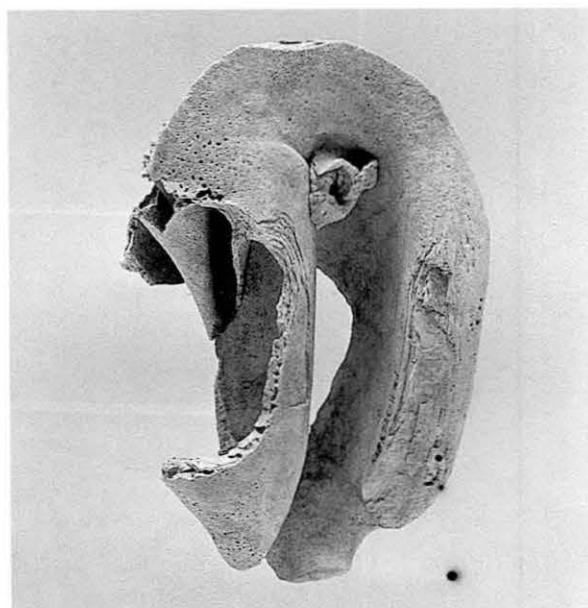
P L.14 土器（胴部1～7、底部8～13）



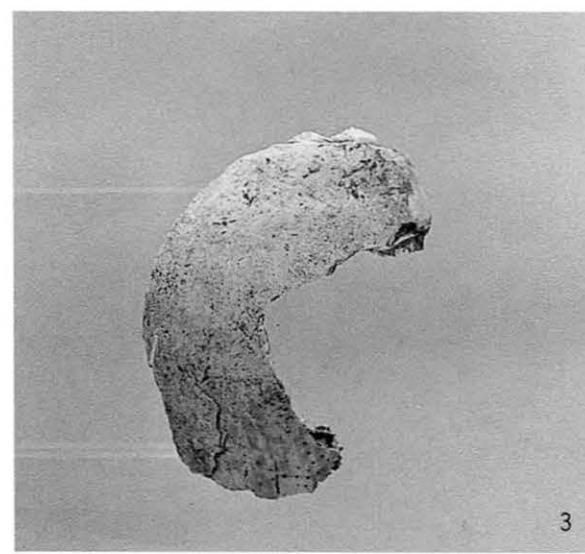
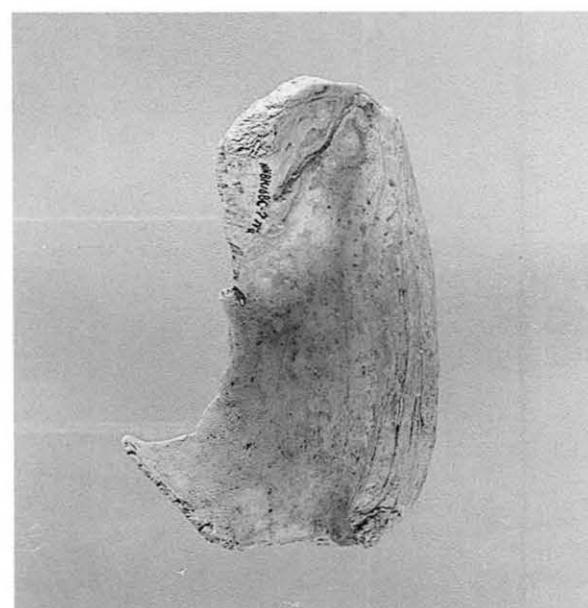
P L.15 石 器



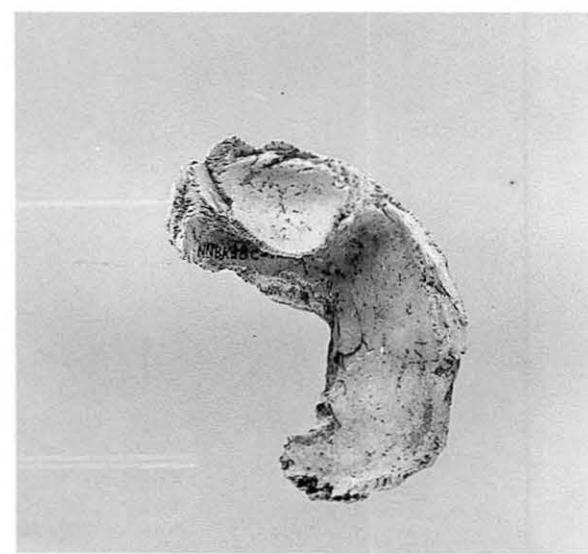
1



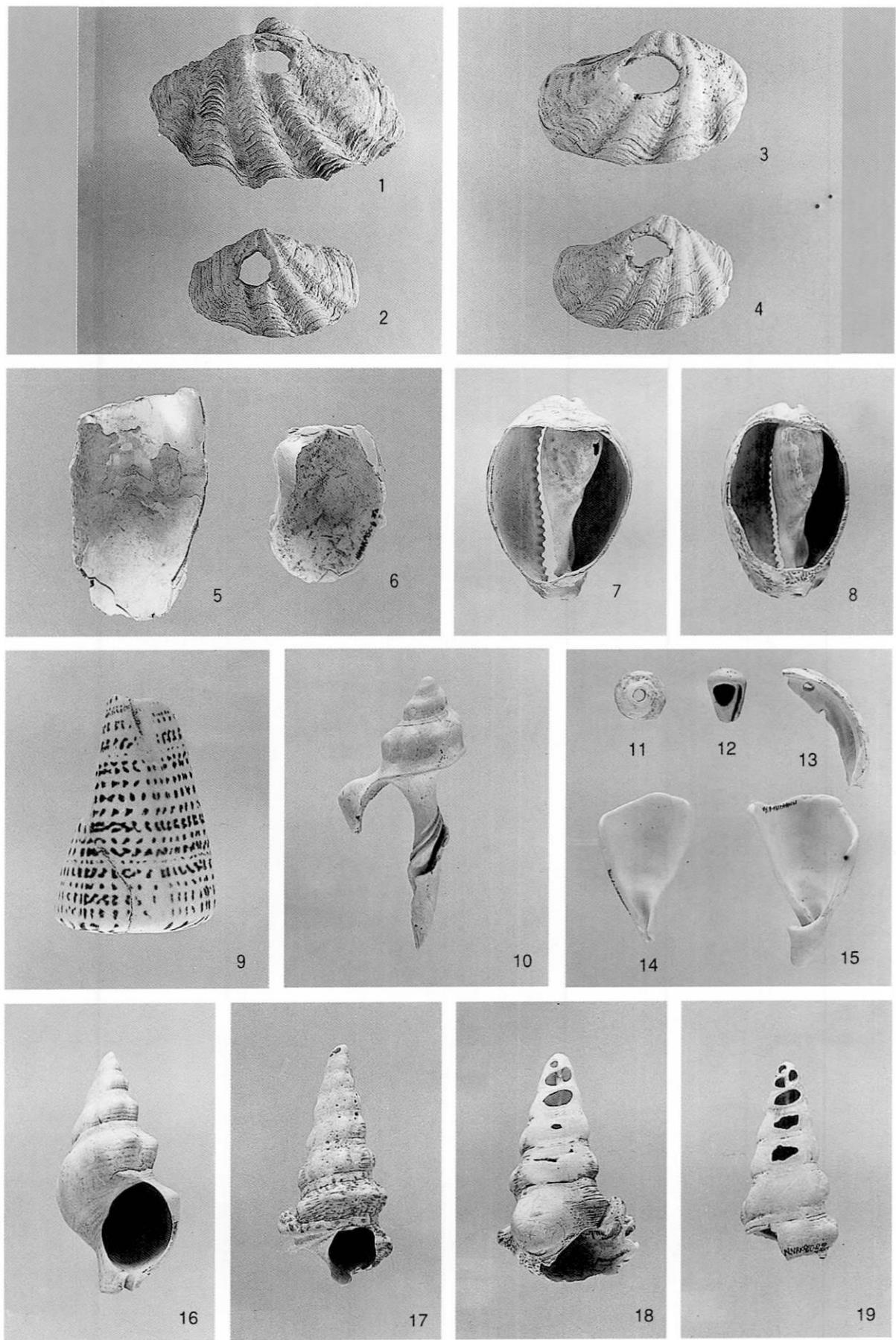
2



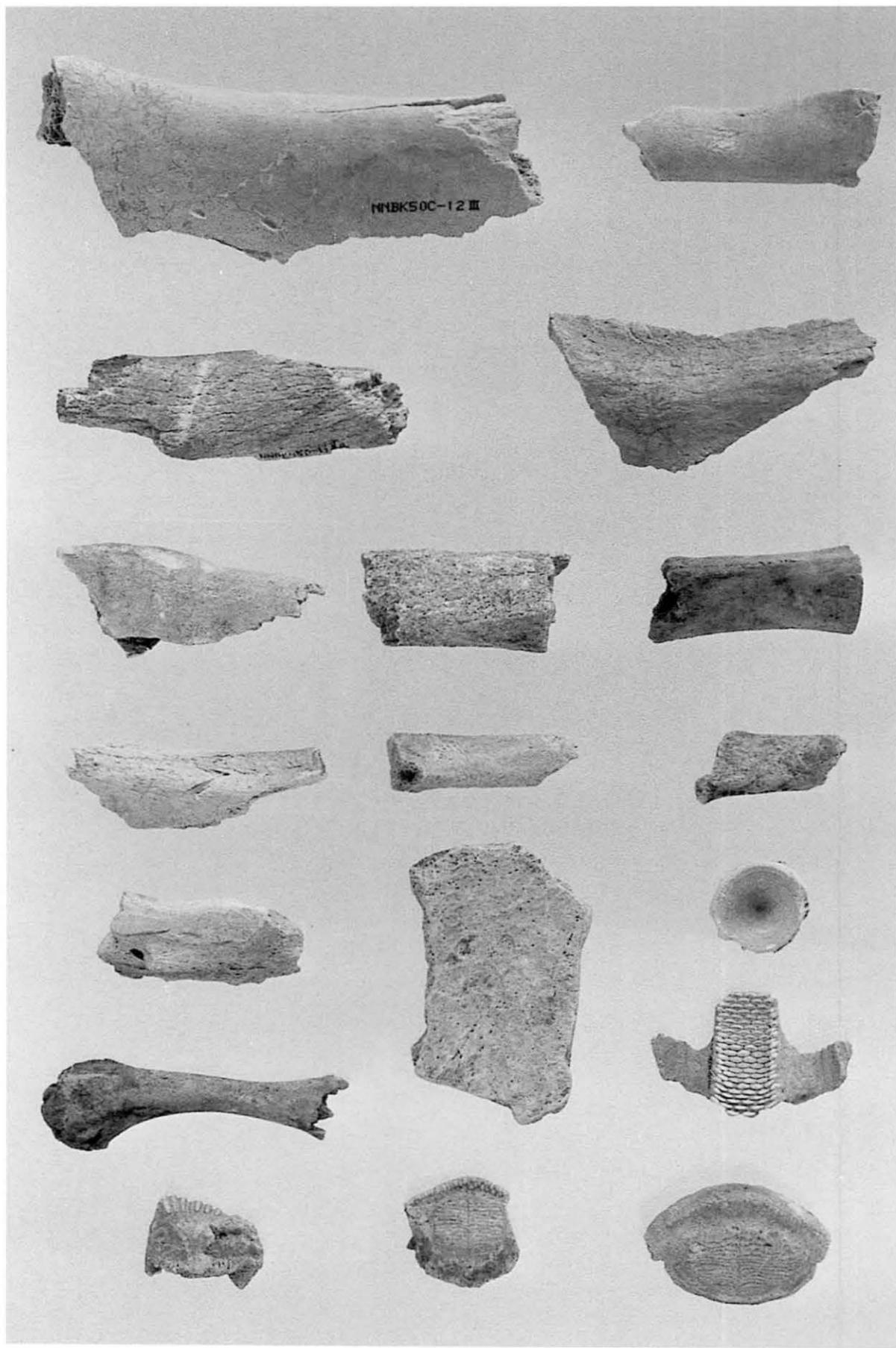
3



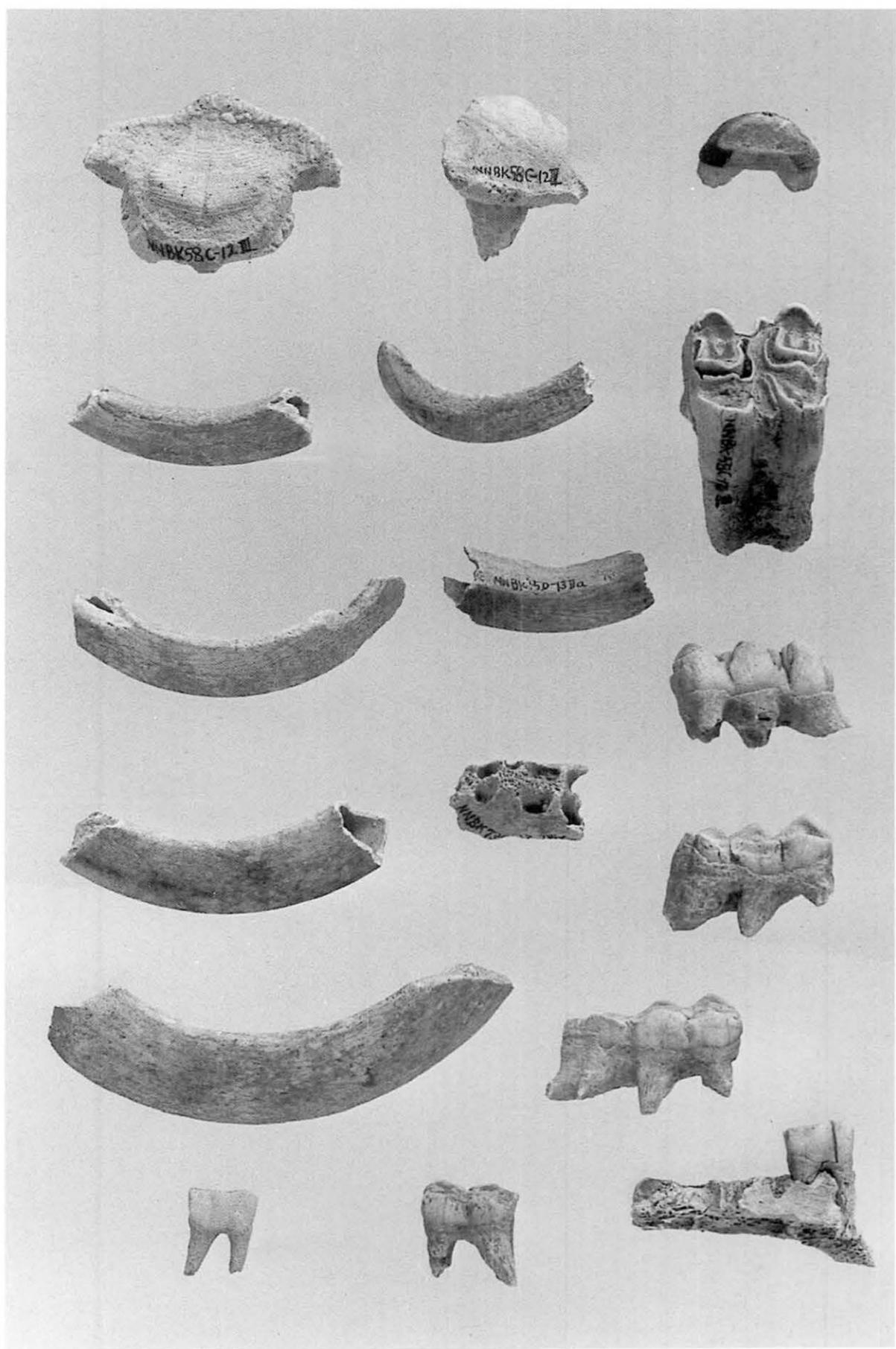
P L.16 貝製品



P L.17 貝製品



P L.18 骨類 1



P L.19 骨類 2

付 錄

名護市の遺跡一覧表

名護市内の指定文化財総括表

名護市の遺跡一覧表

地区	遺跡名	所在地	時代区分	備考
屋我地12	運天原サバヤ貝塚	運天原200-1ホカ	前期？・中期？・後期	1956年指定 県指定史跡
	タキギター河口遺物散布地（仮称）	運天原5ホカ	前期・グシク時代	アジャブク川河口遺物散布地を改称
	済井出長佐久（ナガサク）貝塚	済井出1372-2ホカ	後期	
	大堂原(ウフドーバル)貝塚	済井出1361ホカ	早期・前期・中期？・後期	1998年から発掘調査実施中
	ハンタジー遺跡（仮称）	済井出1285ホカ	グシク時代	遺物包含層の自然破壊が進む
	大堂浜遺物散布地（仮称）	済井出1216	前期・後期？	愛楽園東方遺物散布地を改称
	饒平名シマスハー御嶽遺跡群	饒平名1208ホカ	グシク時代～近世	饒平名の古集落跡。一部破壊
	ナンマー貝塚	饒平名748ホカ	後期	
	アマグシク東方遺物散布地（仮称）	屋我21ホカ	後期？	
	屋我グシク遺跡群	屋我363ホカ	グシク時代～近世	屋我・済井出の古集落。80年発掘調査
羽地12	墨屋原(スミヤバル)遺跡	屋我1ホカ	早期・中期・後期	
	墨屋原浜崎遺跡	屋我122ホカ	中期・後期	集落跡？1980年9月試掘調査
	瀬洲村（シームラ）跡遺跡	源河1659ホカ	グシク時代～近世	源河の古集落の一つ
	源河大(ウー)グシク遺跡	源河227ホカ	グシク時代～近世	源河の古集落の一つ
	真喜屋平田遺物散布地	真喜屋		
	真喜屋阿社義遺跡散布地	真喜屋		
	阿波茶部遺物散布地	真喜屋		
	奥武原遺跡	真喜屋940ホカ	中期～後期	羽地地区唯一の貝塚時代遺跡
	上之御嶽遺跡	真喜屋1483-1ホカ	グシク時代	真喜屋の古集落跡？
	川之上(ハースウイ)遺跡	仲尾次389ホカ	グシク時代	
12	ウフ御嶽土器出土地（仮称）	仲尾次1206ホカ	グシク時代？	
	仲尾次上グシク遺跡	仲尾次787ホカ	グシク時代？～近世	仲尾次の古集落跡
	仲尾古村遺跡	仲尾時384ホカ	グシク時代～近世	仲尾の古集落跡
	親川グシク遺跡（羽地グシク）	親川353ホカ	グシク時代	石垣、遺物包含層を有する
	羽地間切番所跡	親川308-1ホカ	古琉球～近世	
	仲間（ナハマ）遺跡	田井等357ホカ	グシク時代	
	田井等（テーヤ）遺跡	田井等294-2ホカ	グシク時代～近世	田井等の古集落跡

羽 地 25	ヤトバラ殿遺跡	田井等329ha	近世	
	デーグシク遺跡	田井等462-1ha	グシク時代	
	フガヤ遺跡	田井等481ha	グシク時代	
	谷田(コクデン)遺跡	川上265ha	グシク時代~古琉球	川上の古集落跡
	川上(ハーミー)遺跡	川上3ha	グシク時代	川上の古集落跡
	親(ウェー)グシク遺跡	川上1016-1ha	グシク時代?	川上の古集落跡
	振慶名遺物散布地 (仮称)	振慶名8ha	グシク時代~古琉球	
	伊差川古島遺跡	伊差川667-1ha	グシク時代~近世	伊差川の古集落
	我部祖河瓦窯跡	我部祖河		
	古我知焼窯跡	古我知503ha	近世	1972年指定 県指定史跡
屋 部 7	安和貝塚	安和49ha	後期・グシク時代	1980年10月、試掘調査
	部間権現青磁出土地 (仮称)	安和2618ha	古琉球?	洞穴内より青磁採集
	屋部前田原貝塚	屋部470ha	後期~グシク時代	
	屋部貝塚	屋部178ha	後期	1980年7月、試掘調査
	東兼久原貝塚	宇茂佐202ha	後期~グシク時代	
	屋部川口古瓦出土地	宇茂佐42-2ha	グシク時代?	1960年9月、大川清氏が調査
名 護	宇茂佐古島遺跡	宇茂佐572ha	グシク時代~近世	宇茂佐・屋部の古集落跡
	宮里古島遺跡	為又894ha	古琉球?~近世	宮里の前集落跡、採土で破壊
	大西区遺物散布地 (仮称)	名護2739-1ha	(不明)	
	大堂原 (ボードーバル) 西遺跡	名護2679ha	グシク時代~近世	大兼久の古集落?
	大堂原東遺物散布地 (仮称)	名護2554ha	後期~グシク時代	畠地開墾により一部破壊
	大中区遺物散布地 (仮称)	名護	(不明)	宅地造成で破壊
	名護貝塚	名護403ha	後期	宅地造成で破壊が続く
	アバヌク貝塚	名護303ha	後期	大兼久貝塚を改称
	溝原 (ミズバル) 貝塚	東江291ha	後期	1981年7月、試掘調査
	溝原人骨出土地	東江288ha	(不明)	旧北部土木事務所構内
	城 (グシク) 人骨出土地	城596	(不明)	
	城古錢出土地	城	グシク時代	15世紀以前の中国古銭が出土
	ナングシク遺跡群	名護2150ha	グシク時代~近世	城の古集落跡
	許田貝塚	許田222ha	後期	

名 護 17	イシグムイ遺物散布地（仮称）	喜瀬316ha	(不明)	
	喜瀬山田原遺物散布地（仮称）	喜瀬1168ha	(不明)	
	部瀬名貝塚（喜瀬貝塚）	喜瀬1939ha	後期	1992年、1999年発掘調査
	部瀬名南遺跡	喜瀬部瀬名原1919ha	前期	2000年発掘調査
久 志 18	有津（アツ）遺跡	天仁屋465ha	前期	県道により一部破壊
	天仁屋原遺跡	天仁屋906ha	グシク時代～近世	天仁屋の古集落跡
	ハサマ遺跡	天仁屋825-10ha	近世～近代	底仁屋の古集落
	嘉陽貝塚	嘉陽80ha	後期～グシク時代	嘉陽貝塚はマンカ原散布地を含む
	嘉陽原（ハヨーバロー）遺跡	嘉陽633ha	グシク時代～近世	
	安部貝塚	安部307ha	後期・グシク時代～近世	
	北上原遺跡	安部218-3ha	グシク時代～近世	
	上之島（ウイヌシマ）遺跡	安部251-1ha	古琉球？～近世	安部の前集落跡
	嘉手苅村遺跡	汀間860ha	古琉球？～近世	汀間の前集落跡
	思原（ウムイバル）遺跡	辺野古360-2ha	後期？	辺野古キャンプシュワーブ内
	思原長佐久遺物散布地	辺野古306-105ha		辺野古キャンプシュワーブ内
	思原石器出土地	辺野古277ha		辺野古キャンプシュワーブ内
	大又遺跡	辺野古365ha		辺野古キャンプシュワーブ内
	大川田原遺跡	久志1294ha	前期	出土遺物は客土内？
	久志貝塚	久志71ha	後期～グシク時代	集落跡、1979年発掘調査
18	上里グシク遺跡（久志グシク）	久志484-2ha	グシク時代	久志の古集落跡？
	久志古島遺跡	久志369ha	古琉球～近世	久志の古集落跡
	前田原水田遺跡	久志474ha	古琉球～近世	水田跡、1979年発掘調査

※名護市教育委員会1996年作製の「名護市の遺跡一覧表」を一部追加・修正を行った。

名護市内の指定文化財総括表

平成13年（2001年）3月現在

種別	指定別	国	県	市	合計	備考
有形文化財	建造物		1	1	2	屋部の久護家 源河ウエーキ
	絵画			1	1	琉球寫真景絵巻
	工芸		1	8	9	古我知焼耳付壺 ほか
	書跡			1	1	程順則書軸
	古文書			1	1	我部祖河仲ノ屋文書
	歴史資料		1		1	三府龍脉碑
民俗文化財	有形		2	5	7	我部祖河の高倉 ほか
	無形		1	2	3	源河の長者の大主 安和のウシデーク ほか
記念物	記念物	植物	1	2	9	12 ひんぶんガジュマル 真喜屋のサガリバナ ほか
		動物	8	8	1	17 ケナガネズミ ほか
		地質			1	1 底仁屋の褶曲
		保護区		1		嘉津宇岳安和岳八重岳
	史跡		3	5	8	改決羽地川碑記 ほか
	名勝		1		1	轟の滝
	合計		9	21	35	65

※名護市教育委員会『名護市の文化財』1997年作製をもとに、一部追加を行った。

名護市文化財調査報告－14

部瀬名貝塚

－国道58号・部瀬名線道路線形改良事業に伴う緊急発掘調査報告書－

発行年 平成13年（2001年）3月30日

発 行 名護市教育委員会

編 集 名護市教育委員会 社会教育課文化財係

〒905-8540 名護市港一丁目1番1号

TEL 0980 (53) 5429

印 刷 沖縄高速印刷株式会社

〒901-1111 南風原町字兼城577番地

TEL 098-889-5513
